

清代晚期官僚の日常生活における書法

白 謙 慎

徳 泉 さ ち 訳

はじめに

- 一、日課としての習字、および関連する活動
- 二、応酬書法の主要形式とその数量
- 三、対聯・扇面の使用
- 四、書写効率の向上
 - (一) 書写内容の準備
 - (二) 本文と落款を別に書写する
 - (三) 墨汁の購入と墨磨り機の製造
 - (四) 代筆の依頼
- 五、人口増加の書法に対する影響
- 六、なぜ扇対がこれほど多いのか
- 七、清代晚期官僚が書を書らないことについて
- 八、索書——特殊な礼品経済

結語

はじめに

表現や様式研究に重点が置かれがちであった芸術史研究が社会史に目を向けるようになって以来、「応酬書法」は書法史研究の重要な一課題となり、

研究成果が蓄積されてきた。⁽¹⁾これらの先行研究も大変多くの資料に基づいてなされてきたが、それでも本論で取り上げる清代晚期の資料の量には遠く及ばない。当時の文人の多くは日記をつける習慣があり、また今日と時代が近いこともあり、幸いにも多くの書簡が残されている。本論では、清代晚期の政府官僚の日記や書簡を基本資料として、彼らの日常生活における書法活動についての初歩的研究を行う。⁽²⁾

清代晚期にはすでに西洋から硬筆が移入されてはいたものの、さほど普及しておらず、いまだ毛筆が当時の官僚らの主要な筆記具であった。⁽³⁾彼らの書簡、詩稿、帳簿、メモ、日記等は基本的に毛筆で書かれている。これらの書は今日、書法作品と見なされ博物館に収蔵されたり、オークション会社によって競売されることもある。このような現状は、古人の書き残したあらゆる文字は「書法」であって、日常的書写活動の産物であっても書法活動と見なされ、また文人は日々書法を実践し「書法を創作」していたのだ、という印象すらもたらそう。本論では、清代晚期官僚のあらゆる日常的な書写活動を論じるわけではなく、例えば対聯や扇面といった比較的鑑賞性の強い分野の書を重視していく。これは問題を論じるにあたっての便宜的な対応である。

それというのも中国古代の書法では、実用と芸術の境界がかなり曖昧であったためである。例えば、古来、書簡は書法作品の一大ジャンルであるが、文人が書簡を書くことは、その消息を伝えるだけでなく、自身の書芸を示すことでもあった。^(歌者註¹ 訳者註²) 寿幛や挽聯もまた同じく、実用的でありながら芸術性を追求したものである。

さて、清代晚期官僚の日常的な書法活動は、「練習」「自娛」「応酬」の三種に分けることができる。「練習」とは、古代の碑帖を臨書することを指し、自らの創作的な書法の芸術水準を高めるためになされる。「自娛」とは、書いた文字に美を見出し、愉悦を得ることを言う。また「応酬」とは、様々な社会の場面に応じて書作することを指す。ただし、実際の書法活動では、このような明確な区分がつけられないことも往々にある。「練習」と「自娛」には重複する部分があり、また、「練習」を経て完成した書は人に贈られ「応酬」書となる。しかしながら、こうした分類を設けることは、清代晚期官僚が書いた応酬書の数量や使用範囲、社会的機能を説明することにつながり、また彼らの純粋な芸術活動についての正しい理解を得ることもなるだろう。以下、主に「練習」と「応酬」から論じていくことにしたい。

一、日課としての習字、および関連する活動

「日課」とは厳密には毎日行うことを指すが、官僚の公務は多忙であり、戦争や旅行、その他の緊急事態の発生によって日々の「練習」は度々中断されたことが想定される。そのため、ここでは日常的に行われた「練習」を指すことにしたい。

清代晚期の官僚にとって毛筆は毎日使う筆記具であるため、日常書写であっても一種の「練習」に当たるのではないか、という疑問を持たれるかもしれない。

れない。しかし、日常書写と「練習」として字を習う「習字」とは必ずしも同じではない。成人であれば長年の書写実践の過程で、自分なりの書写習慣や書風の特徴が形成されていくものである。しかし、多くの官僚は古典作品の臨書を続け、先賢の筆墨との対話を通じて自己の芸術を完成させていく。

清代晚期の高官の中で、日記だけでなく書簡中でも盛んに習字について言及している人物として、曾国藩（一八一―一八七二）が挙げられよう。曾国藩は日記中で「主敬・静座・読書・読史・謹言・養気・保身・作字」を日課に挙げて⁽⁴⁾いる。また、日記の別箇所には日課のタイムスケジュールが記されており、「毎日早起きし、寸大の字を百回習う、また応酬字を少々書く。午前⁽⁵⁾に経書を読み、知る所があれば『茶余偶談』に記す。日中は史書を読み、また『茶余偶談』を記す。夕方から夜までは文集を読み、『茶余偶談』を記す。詩文を作る時もある。点灯後には読書はしない、ただ文を作るのみだ」とある。⁽⁵⁾ここで注目すべきは、彼の日課として挙げられている書法活動には習字と応酬の二種類があり、応酬は習字に代替できないという点である。⁽⁶⁾

曾国藩の日記には、時おり彼が臨書した碑帖について言及されることもある（例えば「隸書の『孔君碑』を臨書した」や「習字すること二紙、一つは『書譜』を摹す」等とある⁽⁷⁾）。しかし、通常は特に碑帖名を記さずに、ただ「習字」とのみいう。全臨以外に、曾国藩は一日に集中的に一文字のみを繰り返し練習することもある。例えば、道光二十一年（一八四二）七月の数日、彼は顔真卿の「郭氏家廟碑」から一文字だけを選び練習しており、「食事後に「独」字を五十個習う」「徒」字を五十個習う」「経」字を五十個書く」「食事後に「刑」字を三十個習う」と記されている⁽⁸⁾。こうした臨書方法は実に彼独特のものであろう。

曾国藩の弟子である李鴻章（一八二三―一九〇二）もまた習字を日課とし

ていた。二〇一一年春季の西泠印社のオークションに、李鴻章が「聖教序」を臨書した冊頁が出品された。その末尾には外孫の張志沂（一八九六—一九五三）の跋文が付されていた。跋文に「聖教序」の臨本は、外祖である文忠公がかつて北洋に在りし時、公務の暇の日課としたものである。壬辰の春夏の間に書かれた。先母が侍者に官署にとりに行かせ、珍重してこれを蔵した」と記されている。光緒十八年（一八九二）、李鴻章は北洋大臣の任にあり、激務の合間をぬって習字の時間を捻出したのであろう。習字とは曾、李の両氏にとって、芸術面の精進というだけでなく精神の修練でもあり、専心注意して練習し、自己を律することでもあった。

系統的な臨書以外に、曾國藩はしばしば手本から離れた自由な揮毫も行った。彼はそれを「零字を書く」と称している。「零字」の語は日記中に散見され、例えば「夜、零字を沢山書いた。近頃は書法について何か会得したようで、零字を書くたびに、数百にも至る」「夜もまた零字を長いこと書いている。日中も好く作字し、皆寸大の字である。毎日、三、四〇〇ほど書いています」「点灯後も、また零字を数枚書く。最近書法が上達したのは、零字を沢山書き手腕が少し成熟したということであろう」と述べている。⁽⁹⁾ 曾國藩の長子である曾紀沢（一八三九—一八九〇）は、家風をよく継承し、書を学んだ。⁽¹⁰⁾ 彼の日記にもまた「習字すること一紙。食後に零字をたくさん書く」というような記載がよく見られる。すなわち、彼の日課にも臨書と零字が含まれており、両者は区別されている。⁽¹¹⁾

曾國藩と曾紀沢の日記には頻繁に「零字を書く」という語が現れるため、この書法活動の内容を限定する必要がある。曾紀沢は、同治十一年（一八七二）十二月十九日の日記に「零字を百ばかり書く。趙子昂の草書「千字文」一通を臨書する」と述べている。⁽¹²⁾ この記述からも零字を書くことと、臨書と

は明らかに区別されていることがわかる。また、光緒六年（一八八〇）十二月六日には「連日楷書の零字で司空表聖の「詩品」二十四紙を書きまとめて、それを糖印し⁽¹³⁾ 児女のための摹本とする。本日書き終わった。升目を書くのもとても時間がなかった」と記している。「零字」とは一種の自由な運筆であり、「練習」と「自娛」の目的も兼ね、完成した作品は別の用途にも使うことができたようである。

彼の父に比べ、曾紀沢はより系統的な習字をしている。彼は篆隸楷草の四体を好んで書き、いずれの書体も臨書している。同治十一年（一八七二）八月初めから十月の初めにかけて、彼は篆隸楷草の順序で臨書した。一日目は篆書を臨書し、次の日は隸書、その後日には楷書、最後に草書というように、この順序を往復している（時に中断したり、不規則になることもある）。⁽¹⁴⁾ これより、彼の習字に対するきわめて厳格な取り組みが看取できよう。

人によって記録の程度に差はあるが、清代晩期の官僚の日記には習字に関する記述が散見される。曾國藩の幕僚であり、後に江蘇按察使となった李鴻裔（眉生、一八三一—一八八五）もまた書法を日課としていた。彼の光緒六年から七年（一八八〇—一八八一）の日記には、時折習字について話題が及んでいる。日記の初めの頁には毎日の「読・看・写」の内容が記されており、例えば、「一経一集を読む、……一史一子を見る、……漢碑を臨書し、集帖を看て、あるいはたまに摹書する。毎日読・看・写の三事は常課とする」とあり、習字が日課の一つになっていることがわかる。⁽¹⁵⁾

また、かつて二代の帝師であった翁同龢（一八三〇—一九〇四）の日記中にも、時に臨帖や習字に関する記述が見られる。例えば、光緒十二年（一八八六）十月七日には「張遷碑」数行を臨書する。先月の二六日から隸書を習っている。まさしく忙中閑ありだ」とある。⁽¹⁶⁾ 翁同龢は日課として隸書を習

い始めてからしばらく経った後に、日記に簡単な記録を残したことになる。なお、翁同龢の玄孫である翁萬戈氏は、翁同龢が顔真卿の行書「争座位帖」を四条屏に臨書したものを所蔵している（挿図1）。落款には「壬寅三月、臂痛未瘳、漫臨。松禪翁同龢（光緒二十八年（一九〇二）三月、腕の痛みはまだ治らず、ゆつくりと臨書した。松禪翁同龢）」とあるが、該当する時期の日記には、顔真卿を臨書していた旨は記されていない。これは、必ずしも書法活

挿図1 行書臨顔真卿争座位帖四条屏 翁同龢（1902年） 翁萬戈氏蔵

動が日記に記されない例と言えよう。

翁同龢の後輩に当たる葉昌熾（一八四九—一九一七）は数十年の長きに及ぶ『縁督廬日記』を残したが、そこにも書法活動の記録が断片的に見える。例えば、同治十二年（一八七三）十月十五日の日記には「月初めより、毎日顔真卿の書を七、八十字書く事を日課としている」という⁽¹⁷⁾。葉昌熾は十月一日より顔真卿の臨書を日課とし始めたが、十五日後によくやく日記に書き記しており、これ以後は日記中に関連する記述は見られない。

おそらく日課としての習字は当時あまりにありふれたことであるため、日記に書き残すまでもなかったであろう。呉大澂（一八三五—一九〇二）は、学書について詳細な記録を残しているわけではないが、彼の日記の端々より彼が書法活動を日課としたことがうかがえる。例えば、同治八年（一八六九）五月二十四日の日記に「夕飯後、潤之弟と論じた。人のなすべき道は必ず孝悌より始まり、あわせて読書、作文、読文、写字に勉めて日課とすれば、一日の積み重ねは小さくとも、一月たてば大きな蓄積となる。虚しく日々を過ごしてはならない」と記す⁽¹⁸⁾。呉大澂は「写字（字を書くこと）」を日課の一つとすべきとし、人の道に不可欠な課程としてまで説いている。それを踏まえれば、彼本人もこのような日課を持っていたと考えられよう（少なくとも過去にはそうであったろう）。これ以外にも、友人が呉大澂に宛てた書簡中にも彼が学書に励んでいたことを伝える記述がある。十九世紀の七十年代初頭、呉大澂は京師の翰林院の職にあり、清代晩期の大収蔵家である潘祖蔭（一八三〇—一八九〇）と親しく交流していた。潘祖蔭は呉大澂の大家に敬服しており、多くの書簡で彼に賞賛の辞を贈っている。時に、潘祖蔭は呉大澂に教えを請い「大家はどこから学び始めればよいでしょう。都合のよい時にご教示ください。学びたい気持ちに溢れています」と記し⁽¹⁹⁾、また別の書簡では

「我が弟が以前より篆書を習おうとしていますが、何から始めるのがよいでしょう。鐘鼎の臨摹から始めるのであれば私には対応できません。かつて散氏盤を百本臨書したうちの一本を恵贈頂けませんでしょうか」と記し、呉大澂に学書の参考とするために臨本を求めている。⁽²⁰⁾ 呉大澂は一八七〇年代の初めに京師に来て以降、大篆の系統的な研究に取り組み始めており、「散氏盤」の臨書もおそらくこの頃になされたのであろう。「散氏盤」は全三五七字に及ぶ長い銘文を持つ。さらに、大篆は書くのに時間がかかることもあり、百本を臨書するには数ヶ月、または一年以上が費やされたかもしれない。これより、彼の書法の研鑽ぶりを見てとることができる。⁽²¹⁾

「散氏盤」の書風は奇俊で多彩な表現が盛り込まれているため、篆書の初学者には難易度が高い。そのため、呉大澂はおそらく潘祖蔭に「石鼓文」を先に習うことを提案したのであろう。「石鼓文」は比較的均整がとれており、小篆の字形や用筆に近く着手しやすい。潘祖蔭は呉大澂への書簡に「石鼓文」の臨書は気がつまるようで、一枚書いては捨てています。百本臨書したらまた御指正ください」と記している。⁽²²⁾ 潘祖蔭は「石鼓文」を百回臨書することを計画しており、それを日課としたようだ。

習字と関連する日常的な書法活動として、道を同じくする者同士による書芸の切磋琢磨が挙げられる。曾国藩の友人には、清代晩期に強い影響力を持った書法家である何紹基（子貞、一七九九—一八七三）がいた。二人は面会する毎に書法談義に興じているが、例えば曾国藩の日記には「酒を飲んだ後、子貞と書について談じた」といい、または「何子貞を訪ね、彼の作字を観た。真理を体得することは難しく、日頃の自分の得る所の浅さを感じた」と記している。⁽²³⁾ 清代の地方官は幕府を開いており、清代晩期の多くの官僚たちは書法に長じた幕友を招聘した。曾国藩の幕中には莫友芝（子偲、一八一—一

八七二）、張裕釗（一八二三—一八九四）、李鴻裔（眉生）がおり、曾国藩は彼らと共に書法の探求に励んだ。曾国藩の日記には「莫子偲の作字を観た」「莫子偲の大篆を観るに、筆力、法度がある」「莫子偲が金陵城外の梁碑三通、唐碑一通を採拓してきた。これを共に見て評論した」「眉生と古人の作字の法について論じ、燈をつける時間になり解散した」と記されている。⁽²⁴⁾ また、翁同龢の日記にも同じく友人と書について論じた記述は多くあり、一例としては「黄孝侯に会って筆法を論じた」「福元修師に面会し書法を論じた」などである。⁽²⁵⁾

清代晩期の官僚は書芸の研鑽に実に熱心であり、それは書法芸術に対する絶え間ない内省的な探求と、深い理解にも反映されている。曾国藩は咸豊九年（一八五九）四月八日に「習字すること二紙。近頃はよく字を書いているが、年とともに手は鈍り、上達しなくなった。三十歳以前に自らの規模を確立しなければならぬことを改めて知る。三十歳以後はただ「熟」の時である。熟を極めることで巧妙が現われ出てくるのであろう。筆意間架は「梓匠の規」である。⁽²⁶⁾ 熟により妙を得ても、巧みになることはできない。私は三、四十歳の時に規矩が定まらなかつたため、為すべきものがないのだ。人はよく「妙に至るのに熟し過ぎるといふことではない」「熟せば巧みになる」といい、⁽²⁷⁾ また「成熟」ともいう。妙、巧、成は、みなよく熟を極めた後に会得できるということだ。それはひとり書だけのことではなからう。およそ天下の百技は皆、先に規模が定まって後に精熟を求めるものなのだ」と述べている。⁽²⁷⁾ 彼の日記には同様の記述が多く見られ、これらは理学思想の深い影響が反映されたものといえよう。彼は書法もまた、内省の対象として記録しているのである。

翁同龢の日記にも、彼の学書に対する心得がしばしば記されている。同治

五年（一八六六）十二月一日には「字を書き、古人の用筆の豊左の訣を悟つた」と記す。⁽²⁸⁾ また翌年の八月八日には「城市から出ず、臨帖に励み「戒虚鋒」の一語を悟った」とし、また同治九年（一八七〇）二月二十一日には「近頃、書法を少し悟った。筆を運ぶには曲折させ靈動させなければならぬ」という。ここに引用した三箇所には「悟る」という語が用いられているが、それは習字とは書芸の真理や悟りを体得していく過程であるという翁同龢の考えが反映されているのであろう。翁同龢はすでに書法に熟達していたにもかかわらず、初学者のように勤勉に取り組んでいるのである。

以上、引用してきた記述より、清代晩期の官僚にとって習字とは審美の追求が一つの目的であったことが知られる。しかし、当時の上意下達式の官僚体系において書法の探求がなされる際に、審美の追求の自由に対してもある種の制約がかけられることがあったようだ。道光二十二年（一八四二）二月二十四日、曾国藩は父母に宛てた書簡中に九弟の曾国荃（一八二四—一八九〇）が書法の練習をしていることに触れ、「（国荃は）二月以来、毎日習字をし、長足の進歩を遂げた。常に小楷を習い、来年の考差に備えている。近頃は智永の「千字文」を臨書し、顔、柳の二家の帖は時宜に合わないで習っていない」と記している。⁽³¹⁾ 曾国藩は数年前にすでに進士となっているが、弟の曾国荃はまさにこの時、科挙の試験の準備中であった。書簡中の「考差」とは翌年に行われる在京官僚の出世の重要な試験である翰詹官大考を指す。彼は父母に宛てた書簡中で文官の試験における書法の重要性を説いており、「時宜に合わない」ため顔真卿や柳公権を避けて智永を選んだ、という。これはあくまで現実的な配慮であり、彼の書法活動のすべてに功利性を読み取るべきではなからう。なぜなら、これ以降、太平軍作戦の歳月の間、曾国藩は試験のプレッシャーがなくなっても依然として日々習字を続けているから

である。

二、応酬書法の主要形式とその数量

応酬書法については今までに少なからぬ研究がある。先行研究によって、現存する古代の書法において応酬書法がきわめて大きな比重を占めることが明らかにされてきた。本章では、豊富に残された清代晩期の官僚の日記より、応酬書法の中で最も通行した形式や数量、それらの書写速度について具体的に明らかにし、あわせて官僚たちが日常生活の中でどの程度の時間を書字活動に費やしたのか検討してみたい。

清代晩期の人々の日記を読むと、扇面と対聯（当時の人は並称して「扇対」という）が応酬書法の中で最も流行した形式であったことがわかる。その数量は条幅や手巻、冊頁などを遙かに凌ぐ。清代晩期の名官僚であり駐英法大使であった郭嵩燾（一八一八—一八九二）は三十七年間に及ぶ日記を付けたが、彼の日記にも時折、書法活動の記録が見える。同治元年（一八六一）七月四日には「雨。各所に求められた扇対を処理し、終日応酬書を書く。とてもくたびれた」とある。⁽³²⁾ 応酬書に言及する中で扇対にのみ触れており、その量の多さがうかがえよう。呉大澂は同治八年（一八六九）五月五日に「画扇を二柄、篆書扇面を三柄、篆書の対聯を三副、近頃は扇対を求められることがますます増えて、とても書ききれない。親族や友人にまで催促されている。毎日朝晩さまって数件書いており、まさに陶公が壁を運ぶかのような」⁽³³⁾ という。呉大澂もまた応酬に話が及べば「扇対」の語を使っており、対聯と扇面が応酬書法の主要な二形式であったことがわかる。明らかな贋作はさておき、近年の中国大陸のオークション会社に出品されている書作品を検索すると、清代晩期の官僚（曾国藩、左宗棠、郭嵩燾、李鴻章、沈葆楨、翁同龢、

呉大澂、張之洞、曾紀沢等)の作品中で最多数を占めるのは対聯である(図版五)。オークション会社が正確な統計的数字を提供するわけではないものの、清代晩期の日記などから受ける印象とあわせてみても、対聯が最も流行した書法形式と見てよからう。

実際に、清代晩期の官僚は大量の対聯を書いている。書名のある高官の書いた対聯の量は我々の想像を遙かに超える。曾国藩を例に取って見ると、彼は同治三年(一八六四)三月に一〇六副の対聯を書いている⁽³⁴⁾。また、同治七年(一八六八)二月には、一四六副の対聯を書き上げている⁽³⁵⁾。曾国藩については、毎月百余りの対聯を書くのが常態であったようである。

一方、翁同龢は同治七年(一八六八)十月、妻子の棺柩を安葬するために故郷の常熟に赴いているが、そこで実に数多くの書作をなしている。十月三日の日記に「終日大雨。墓参ができない。頼まれた楹帖を五十余り、扇を十余り、手は抜けそうだ。見物人に垣根のように取り囲まれて筆を動かすがただただ恥を増すばかりである」とあり、一日に六、七十件の書を揮毫している⁽³⁶⁾。また光緒元年(一八七五)二月十一日には「対聯を三十副書く。くたびれ果てた」と記している⁽³⁷⁾。翁同龢にとっては、一日に数十件の対聯や扇面を書くことは日常茶飯事だったのであろう。

しかし、彼の日記には書作の具体的な数量についての言及は少なく、むしろ、応酬書の揮毫に費やされた時間や、またその後の心身の状況を述べたものが多い。例えば「終日出かけず、応酬字を書いた。一日があつという間である」「楹帖を書いた。護衛や巡捕の者たちが紙を持ってやってくる。途切れることなく対応し、すっかり腕が痛くなつてしまった」「終日、応酬字を書く。きわめて忙しく、宿直よりも忙しくいらいだ」と嘆いている⁽³⁸⁾。

曾紀沢の日記にも扇対に関する記事は多くみられる。同治十年(一八七二)

十二月十八日に「食事後……八言の対聯十七副を書く。食事後……八言の対聯五副、五言の対聯四十副を書く。夕飯後、摺扇⁽³⁹⁾を書く、篆書を一柄、楷書を一柄」とあり、この一日で八言対聯二十二副、五言対聯四十副、扇面二張、計六十四件の扇対を書いたことになる。同治十三年(一八七四)十一月二十三日には「対聯四十副を書く。……摺扇五柄を書く。……夕飯後にまた摺扇十五柄書く」と記し、一日で対聯を四十副、摺扇を二十柄、計六十件にも及ぶ、いわゆる「作品」を制作したことになる⁽⁴⁰⁾。こうした記述より曾紀沢も一日のうちは何度か書作し、数十件の作品を書くことは日常的であったことが看取できる⁽⁴¹⁾。

筆者の管見にふれた資料によれば、一日の揮毫量が最も多い人物は何紹基である。道光十六年(一八三六)に進士となり官途に就いてより、彼の書を求める人が絶えなかった。道光十九年(一八三九)九月二十六日、郷試を主管するため福州に滞在したが、その際には「扇対をそれぞれ数十件書く。腕が脱けそうだ」と記している。また道光二十四年(一八四四)四月十一日には京師にいて「書いた対聯は百になりそうだ」と記し、翌日には、「大字の対聯を七十余副書いた」とある⁽⁴²⁾。その翌年の十月七日も在京で「酔った後に対聯を八十余り書いた。暢筆というべきであろう」と記している⁽⁴³⁾。咸豊二年(一八五二)九月八日も在京で「大字を書いて日が暮れた。連夜対聯を書き、百七に及ぶ」という⁽⁴⁴⁾。何紹基の対聯の多くは行書または行楷書で書かれており、その書字速度がかなり早いとはいえ、この量はまさに驚異的であろう。

なお、清代晩期官僚は扇面もまたよく書いており、数量上では対聯におおむね匹敵する。そもそも扇子とは暑さを凌ぐための用具であり、夏季にはその需要がいっそう高まった。曾紀沢の同治十三年(一八七四)四、五月の日記には扇子に関する記録が甚だ多くなる。四月二十一日に「女性用の摺扇二

柄に四体を書く。……夕飯後に男性用の摺扇一柄に四体を書く」とあり、二十三日には「摺扇二柄を書く。……宮扇二柄を書く。一つは旧作を録し、きわめて細密である。一つは四体を書く」と記す。⁽⁴⁵⁾四月では合計四十五柄の扇子を、五月には五十二柄の扇子を書いている。⁽⁴⁶⁾なお、呉大澂の日記からは、同治八年（一八六九）の夏六月に彼は少なくとも五十柄の扇子を書いていることが知れる。⁽⁴⁷⁾

暑さを凌ぐための道具であれば、扇面は季節限定の使用となろう。しかし、明代の書扇について論じた呉鵬氏は、書画扇が芸術品として鑑賞されており、明代晩期には実用ではなく装身具として用いられていたことを指摘している。⁽⁴⁸⁾そのため、四季を通して書画扇の創作は行われた。同治十三年（一八七四）十一月十三日に、曾紀沢は一日に二十六柄の扇子を書いているが、この時期は仲冬である。⁽⁴⁹⁾光緒三年（一八七七）二月二十八日には「夕飯後、静臣弟のために扇を書く。金泥字を挿入したものを四扇、五色字、金泥字のものを三十扇書く」という。⁽⁵⁰⁾時に仲春であるが、一晚に三十余りもの扇子を書いている。この数量に注意すべきであろう。

三、対聯・扇面の使用

対聯は清代初期より流行し始め、清代中晩期には日常生活の中で広汎に使用されていた。芸術作品として鑑賞するだけでなく、冠婚葬祭の際には対聯が用いられた。ある一官僚によれば、親しい同僚の母親の誕生日には寿聯を書き、友人の子が結婚すれば喜聯を書き、親族が逝去すれば挽幛や、時には加えて挽聯を書いたという。光緒十八年（一八九二）夏、李鴻章の後妻である趙小蘭が逝去した。李鴻章は無数の幛聯を受けとり、この時期の書簡では「内子の喪に際し、私の過労を慰問くださり、素幛を遠くより送ってください

り本当に有難うございます。ご厚誼、感謝の念にたえません⁽⁵¹⁾」といった語が何度も繰り返されている。『李鴻章全集』にはこの類の書簡が少なくとも五十通ほどあるが、実際に送られてきた幛聯の数は、それを遥かに上回ったのであろう。

また、李鴻章自身も大量の幛聯を書いている。広東巡撫の劉瑞芬（一八二七—一八九二）が亡くなった時には、李鴻章はその子劉世璋（丙卿）への書簡中に「幛聯を同封しました。追悼の意を表します」と記している。また、福建の水師提台の彭紀南の母が逝去してまもなく、李鴻章は弔信を送り「遠方ゆえ自ら参れませんが、幛聯を同封します。代わりに霊幛に供えて頂ければ幸いです」と記している。閩浙総督の卞宝第（一八二四—一八九三）、浙江道台の李輔耀の父親、河南河北道台の潘牽之の父親、総理各国事務大臣の鄧承修（一八四一—一八九二）、いずれも逝去時に李鴻章は幛聯を贈っている。⁽⁵²⁾

しかしながら、対聯のもっとも一般的な用途は日常生活における礼品、すなわち贈物である。同治七年（一八六八）に翁同龢は回葬のため亡妻と兄の棺の護送に当たったが、その道中の各地方官は区域ごとに官兵と車船を派遣して運搬に当たった。尽力してくれた官兵に翁同龢は労いのために銀を渡し、その他に扇対も贈っている。八月十五日には「夜、両弁に派遣していた者が帰ってきた。それぞれ十両と扇対を渡した」とあり、また九月四日には「鼎營の三炮艇に派遣していた者たちが帰ってきた。各々二金と扇対を報酬として渡した。水夫は船ごとに三千人いる」と記している。⁽⁵³⁾同治十年（一八七二）十二月二十三日に翁同龢の母が没し、翌年夏、彼は亡父と合葬するため故郷である常熟に母の霊柩を運んだ。この時もまた、沿道の官兵に時には銀を、また別に扇対も贈っている。⁽⁵⁴⁾

以上は私的な用途であったが、公的な場でも書法は贈物として用いられて

いた。光緒元年（一八七五）八月四日、同治皇帝の陵寢である惠陵の修造大臣の一人であった翁同龢は「監督や監修の諸君、および遵化州の各官に答礼訪問した。……同行の段□□、李常林には二金と扇対を報酬として与えた」と記している。⁽⁵⁵⁾ 慈安太后は光緒七年（一八八一）三月十日に世を去ったため、九月、翁同龢は殯事で忙しく、協力者には銀だけでなく扇対を贈っており、「家主の劉姓に二両と扇対、茶房に二両、厨房係に四両、陳親方に二両、張姓に二両と扇対、王姓の子供に二両と扇対、子供の名は博謙、元氣いっぱいである。雑役に京製錢五吊と伝令役の張聯芳には贈物を四つと二両と扇対、段隊長に物と扇対、李長齡に茸一両と扇対を贈る、恒和廠に菜と扇対を贈る、李瑛に菜と扇対二つを贈る」と記している。⁽⁵⁶⁾

曾国藩は太平軍作戦の際、部下への褒賞として自らの書を与えることでもあった。朝廷が戦功を立てた軍官に対して論功行賞を授けることはあったが、湘軍統帥として彼は自らの書を贈り部下の感情を繋ぐとしたのである。咸豊八年（一八五八）八月十一日、曾国藩は「食事後に對聯を七つ書く。水師營の陳発祥らの四船、得勝と張定元を賞す」と記している。⁽⁵⁷⁾ 同治二年（一八六三）二月六日には「去年、各營官には大変な苦勞をかけた。これを勞うことがなかったので、一人ずつに對聯を贈る。午後に十七對を書き上げた」といい、七日には「食事後に二十の對聯を書く」とし、また八日に「食事後に對聯を七つ書く」、九日に「昼食後に四十余りの對聯に落款を入れ、各營官に贈る」と記している。⁽⁵⁸⁾ 揮毫に時間がかからないとはいえ、彼も安易に与えていたわけではなく、日記には「營官に各々對聯一つを与えた。丙辰の冬にすでに与えた者には今回は贈らない」と記している。⁽⁵⁹⁾

在京の、特に高官の官僚にはもう一種の書法の応酬があった。それは科擧のために京師にやってきた受験生たちへの対応である。旧時において科擧は

一人の士人の前途、さらに家族の榮譽がかかっており、合格すれば明るい未来が広がり、落第すれば暗然として帰郷するよりほかない。清代晩期において、落第者は帰郷する前に在京の官僚（特に試験管）に書を求める習わしがあった。翁同龢は同治七年（一八六八）四月十六日に「横街に戻り應酬字を書く。おおむね書き終わった。皆應試の落第者である」と記している。⁽⁶⁰⁾ また、光緒三年（一八七七）四月十二日には「對聯を書くのに実に多忙である。皆落第して帰郷する者たちである」という。⁽⁶¹⁾ さらに光緒十五年（一八八九）四月十七、十八日に「また扁額と對聯を五十七件書いた。皆落第して帰る客である。疲勞困憊だ」とも記している。⁽⁶²⁾

落第生のための應酬書は一定期間忙しくなるかもしれないが、試験はそう頻繁に行われているわけではない。日常生活の中では、同僚や友人、同郷人への應酬書がより多かったであろう。翁同龢は光緒十六年（一八九〇）九月二十日に「銘鼎臣の巴溝の別荘へ行った、生琴軒には同僚九人が滞在しており鼎臣は酒食を供し、使者は行き来している。夕暮れには曠然亭に登り、千里を遙かに眺めた」と記している。それから三日後の日記には「對聯を書く。前日の巴溝に泊まった時に友人に求められたものである。對聯を二十副、屏を十条。あまりに多く、息つく間もなく疲れる」という。⁽⁶³⁾ 別荘の集まりに参加した十人の友人が各々對聯を二副ずつ、屏条を一条ずつ求め、一度の集まりのために彼は三十もの應酬書法を書かなければならなかった。これに類する記録は清代晩期官僚の日記や書簡に頻出するが、ここでは紙幅の都合上、いちいち列挙しない。

四、書写効率の向上

日常生活における書法の需要の急増に伴い、清代晩期官僚らは書写効率を

向上させるための方法（あるものは、すでに先達により行われていた有効な方法であるが）を模索するようになった。本章では、（一）書写内容の準備、（二）本文と落款を別に書写する、（三）墨汁の購入と墨磨り機の製造、（四）代筆の依頼、という各方面から検討してみたい。

（一）書写内容の準備

書法とは基本的に文字を扱う芸術であるため、書写量が増えればそれだけ文字内容の準備もまた大変になる。扇面は古典の一部分や一、二首の詩などを抜き書きすればよく、準備作業は比較的容易である。対聯は、通常二十足らずの字が書かれるが、対偶句でなければならぬ。対聯の制作や揮毫の現場の状況について曾國藩の日記には「酉初対聯を九つ書く。うち二件は寿聯であり、句を作りながら書く」と記される。⁽⁶⁴⁾「句を作りながら書く」のであれば、自然と完成までの速度にも影響があるだろう。曾國藩が言及している九副の対聯のうち、七副はその場で句を作ったのではなく、予め自分で作っておいたか、または他人の句を抄録したか、ということになる。彼はまた「対聯を六副書く。そのうち纂句は二副である」⁽⁶⁵⁾とも記しており、彼が書いた対聯の中で自撰の句はかなり少数であったことがうかがえる。

一日の書作の中で多数を占めるのが対聯であるため、揮毫と同時に句を作った可能性は低い。⁽⁶⁶⁾そのため、揮毫前に文字内容を準備しておく必要がある。準備する対偶句はある時は自撰かもしれないが、多くの場合は既成の句や、また他人の句を集めたものである。冠婚葬祭に関わる対聯は内容がある程度決まっており限定的であるが、観賞用の対聯はその限りではない。

清代晚期官僚の多くは対聯の制作に長じていたが、これは長期に及ぶ訓練の結果と言える。旧時の文人はみな詩作の心得があり、七律、五律の中には

必ず対句を含めた。なお、文人は科挙の試験準備のため、八股文を学ばなければならぬ。王凱符は、八股文と八股取士の広まりが明清時代の対聯の発展にもたらした作用を論じたが、論中に「八股文が対聯に与えた影響は二方面があげられる。一つは、八股文は対句を用いるため、八股文を作る中で自然に対聯も作れるようになる。二つ目は、科挙の試験のために、多種多様な学校、一般的な村塾から最高学府である国士監に至るまでみな八股文を学習させた。それは対聯を作るための基礎訓練となった」と指摘している。⁽⁶⁷⁾つまり、このように科挙を通過して仕途に進んだ清代晚期の官僚らはみな童子の功により対聯を作れるようになったのである。

対聯の揮毫があまりに多いため、少なからぬ官僚が対句の抄録を備えていたようだ。郭嵩燾は五百句近くの聯語を抄録していた。⁽⁶⁸⁾また、呉大澂は一八六七年八月一日に「午後、子良丈のところに行ったが会えなかった。松竹齋に行き対聯の紙を買う。輯庭の所に行き、望雲・菱舫と聯句を数十副つくる。深夜まで及びようやく眠れた」と記す。⁽⁶⁹⁾この記述より呉大澂は日頃琉璃廠で紙を買い、友人と共に聯句を作って準備していたことがわかる。また、呉大澂は手元に大篆の聯語百七十五句を手録していたという記録も残る。⁽⁷⁰⁾平時より集めておけば、対聯を書く時に抄録することができ（挿図2）。このように日常生活の中で聯語を輯録しておくことは、乾嘉以来（あるいはより早期から）文人の習慣であった。咸豐十年（一八六〇）三月五日、潘祖蔭（伯寅）は郭嵩燾に彼の祖父でありかつて大学士にも任じられた潘世恩（一七六九—一八五四）が「聯語を手録し、数字を付す」と記した一冊を示した。郭嵩燾はそれに二首の詩と跋文を寄せており「歳は丁未にあり。かつて文恭公（潘世恩）に乞い楹書を習った。十年の兵火によって、旧蔵の書帖はみな散逸してしまつたが、この書のみは残った。伯寅理卿（潘祖蔭）は我が師が手録し

た聯語の一冊を見せてくれた。敬しみて二詩を後に題す」と記している。⁽⁷¹⁾なお、呉大澂の師である馮桂芬（一八〇九—一八七四）もまた対聯の輯録を持つていたといふ。⁽⁷²⁾

多くの官僚らは多忙のため、対聯を専門的に書く代筆人に依頼することもあった。張佩綸（一八四八—一九〇三）は光緒二十年（一八九四）正月十九日に「李光祿の祠が落成した。合肥のため対聯を代筆し、三日で六聯を書き上げたが、思考が難渋している。嘆かわしいことだ」と記す。⁽⁷³⁾ここでいう「合肥」は李鴻章を指す。李鴻章の女婿である張佩綸は当時、李の幕中にあり、そのため李鴻章の代筆を担当していたのである。

また、呉大澂もかつて潘祖蔭の代筆人として対聯を書いていた。同治十年（一八七二）末、同治帝の大婚を翌年に控え、朝廷は皇后の寢宮の扁対屏幅などの揮毫を潘祖蔭に命じたが、彼一人では書ききれなかった。当時、翰林院供職であった呉大澂は顧肇熙（一八四一—一九一〇）と許玉琢（一八二七—一八九三）を招き手伝ってもらった。潘祖蔭は呉大澂に宛てた書簡中に「皇后の邸宅の扁額と対聯、屏幅は三百件余りもある。正月五日までに渡さなければならぬというのに今日命が降った。我が弟よ、明日の昼頃から助けに来てもらえないだろうか。年末にこのように煩わせることは、本当に無茶なお願いである（なお、正月の二・三・四日もどうか来てください、お時間を作ってもらえますか？ 底本と正本は、私が自分で書きます）」と頼み込んでいる。⁽⁷⁴⁾また潘祖蔭は鮑康（一八一〇—一八八二）への書簡の中でも「休む暇もなく、連日揮毫に明け暮れています。清卿の諸君が手伝ってくれていますが、それでも片時も手を休められません。本当に苦しみながら筆を執っています」と嘆いている。⁽⁷⁵⁾

なお、清代晩期には多数の対聯書があり人々はそれを参考にしていたよう

挿図2 集大篆楹聯 呉大澂

だ。同治十三年（一八七四）十一月二十四日、曾紀沢は「辰初に起床、『楹聯叢話』をめくった」と記す。⁽⁷⁶⁾光緒八年（一八八二）四月十七日には「茶食後、『雙魚罌齋偶語鈔』を読む」という。⁽⁷⁷⁾光緒三年（一八七七）三月一日には「卯正に起きる。漢碑鈔本を読み、吉語を摘録した」とある。⁽⁷⁸⁾漢碑の中には吉祥語が多く、対仗の句もあるため、曾紀沢は平素より摘録して手控えとしておいたのだろう。『曾紀沢日記』中には「聯語を集める」という記述も見られる。⁽⁷⁹⁾

(二) 本文と落款を別に書写する

清代晚期官僚の中には対聯を揮毫する際に、落款は書かずにはばらく対句のみを書き、ある程度の量が溜まってからまとめて落款を書くことがあったようだ。その都度、筆を換えずにするため効率が上がると。曾國藩の日記には「巳刻、対聯三件を書き、下款を十余り書く。皆竹屋に送った」とある。⁽⁸⁰⁾ここでいう「下款」とは、落款のことを指す。また、曾紀沢の日記にも似たような記述が散見され、例えば同治十三年（一八七四）十一月二十八日「対聯を二副、屏幅を四紙書く。食事後は四体屏条を四紙、対聯の落款を五副書く。……対聯の落款を十五副、摺扇の落款を十五柄書く。夕飯後はまた五柄書く」とある。⁽⁸¹⁾

このように対句のみ書き、落款を書かないでおくことで様々な要求に柔軟な対応が取れる。曾紀沢は欧州へ出使していた時期、あらかじめ書いておいた書作品を携行し、咄嗟の要求に備えた。光緒七年（一八八一）四月十一日の彼の日記には「早年に書いておいた楹聯、屏幅などを整理して、対聯一副と屏条四幅に落款を入れて日本駐俄大使館の尾崎三良氏に贈る。さらに一函書き彼への答謝とした」とある。⁽⁸²⁾あらかじめ準備しておいた作品に上款と下款（年款を含む）を新たに書き込んで人に贈っているわけだが、受け取った

側は自分のために最近書いた書であると思うであろう。

(三) 墨汁の購入と墨磨り機の製造

字を書くための準備の中でも、墨を磨るのは最も時間がかかる作業であろう。書写量が増えれば、磨墨もまた少なからぬ負担となる。この点については明代晩期の文人たちも記録を残している。嘉慶（二七九六―一八二〇）・道光（一八二一―一八五〇）年間の学者である張穆（一八〇八―一八四九）の題記中に、彼の友人である許瀚（印林、一七九七―一八六六）の苦勞話が活写されており、家童が磨墨に奮闘する情景を伝える。文では「道光二十一年（一八四二）春、印林の仁兄が会試のため都にやってきて、登喜の齋に寄寓した。すると彼の書を求めて門が塞がるほどの人が押し寄せた。家童が磨墨する音は響き渡り、彼の腕は抜けそうだ」と記され、実に大量の墨が必要であったことがわかる。⁽⁸³⁾

清代晩期の官僚の日記には自分で磨墨した記録もあるが、決して多くはない。⁽⁸⁴⁾大字の揮毫は大量の墨を消費するが、そうした時は書童が代わりに墨を磨ったのであろう。もし一日に数十副の対聯を書くのであれば、一人の書童が一日中墨を磨ったとしても足りない。そこで、既製品の墨汁が購入されるようになった。銭存訓氏の研究によれば、十九世紀中期には液体の墨汁はすでに生産されており、最初は主に商業用（印刷業など）に用いられたとい⁽⁸⁵⁾う。光緒年間になり、墨汁の製造技術は進化し、一部の文人たちは墨汁を常用するようになった。光緒十六年（一八九〇）三月十八日、葉昌熾は「允之とともに廠の東に赴き得一閣にて墨汁を買った。店主は謝吉暉といい、名は高粱、湖南人である。著作に『今文房四譜』があり、紙墨の性質についても詳しく論じる。墨汁の価格は二千泉から十両に至る。「雲頭豔」という

名前のものは墨中に紫がかつた光があり、風の強い日や乾燥の激しい日に使えばますます潤いが増すという」と記している。⁽⁸⁶⁾ また翌年の四月十二日には「午後、詠春と勝之を訪ねる。ともに一得閣に行き墨汁を買う。主人の謝祐生には煙霞の癖があるものの、墨理を論じると、実に微妙を極めていいる。程君房や方于魯もみな及ばないほどだ」とある。⁽⁸⁷⁾ 一得閣は北京の琉璃廠にあり、創立は同治初年（一八六〇年代）、墨汁を専門的に扱った。葉昌熾は友人を伴って二度訪れて墨汁を購入し、その品質を賞賛している。この記事からみて墨汁の品質は十九世紀末にはかなりの高水準に達し、少なからぬ人が使用していたのであろう。

しかしながら、磨りたての墨に比べれば墨汁はやはり劣る。そこで、墨磨り機の製造を思い立つ者が現れてくる。王学雷氏がかつて証明したが、蘇州の職業書法家の姚孟起（一八三八—一八九六後）は光緒五年（一八七九）に時計店に委託して一台の墨磨り機を製造した。姚は「手で磨るより十倍早く磨れる」と述べている。⁽⁸⁸⁾ 姚孟起の墨磨り機は、おそらくぜんまい駆動のものであろう。また、それより二年後（一八八一）、曾紀沢の欧州出使に随行した謝智卿も墨磨り機を製造している。⁽⁸⁹⁾ これについて、曾紀沢は光緒七年（一八八一）正月、ロシア滞在中の二十五日の日記に「食事後小村の家で墨磨り機をしばらく見ていた」と記している。この後彼はドイツ、フランスと移動するが、フランスに滞在中に「ロシアで作った墨磨り機を試動させ、智卿と相談した」とある。墨磨り機の改良の必要から「智卿の部屋でひとしきり話し合う。墨磨り機を試演させてみた」「夕飯後、妹の部屋で墨磨り機を見る」とも記されている。⁽⁹⁰⁾ 謝智卿の墨磨り機は欧州で製造されたようだが、どのような駆動かは不詳である。墨汁の製造のみならず墨磨り機もまた清代晩期に発明されたわけだが、それはやはり文人らの日常の書写量の増大に伴うもの

であろう。

（四）代筆の依頼

代筆に関しては多数の先行研究があるため、ここでは清代晩期の官僚に限り簡単に紹介するに留めたい。清代晩期の地方官の幕僚の中には、幕主の代筆人を務めた者たちが存在する。北京大学図書館に所蔵されている吉林在住時（一八八〇年代）の呉大澂の公文書の草稿には、どの書簡を呉大澂自らが書写し、どの書簡は幕僚が代筆したか明記したものがあつた。これらの代筆書簡の筆跡は、呉大澂のものときわめてよく類似しており、幕僚中には代筆に長じた者がいたことがわかる。また、曾國藩や翁同龢のような高官も、代筆を依頼していた。曾國藩の日記には「諸々の応酬の書を整理した。劉裕軒に代筆を頼み、条幅を五枚、扇を二柄書いてもらおう」とある。⁽⁹¹⁾ 翁同龢の日記では「孝侯の子に頼んで諸邸に摺扇を書いて贈ってもらおう」という記述が見える。⁽⁹²⁾

曾紀沢もまた、代筆を依頼することがあつた。時に、自分で書くだけでは間に合わず、一部分は自分で書き、他の部分は代筆を頼むこともあつた。光緒十四年（一八八八）九月、曾紀沢は北京に滞在しており応酬書を大量に抱えていた。この月の十五日「……対聯を書く。夕方頃、徳貞が来て話す。また対聯と、続けて前より計画していた中幅一幀を書く、対聯十五副は、専ら上下の款だけを書く。觀農が代筆人を探してきてくれたが、落款は自分で書くことにした」とある。⁽⁹³⁾ 対聯の大字は代筆を頼み、落款は自分で書いていく点に注目すべきであろう。さらに、彼は部分的に代筆を依頼することもあり、同治十三年（一八七二）十一月二十七日には「三体書を四柄書く。楷書はすべて錦堂が代筆し、私は篆書・隸書・草書の部分を書いた」という記述もあ

る。⁽⁹⁴⁾

本章では書写効率の向上のための方策について論じてきたわけだが、筆者はこれを書法家たちの怠惰と誤解されることを恐れる。書法の需要が激増する状況下にあっても、官僚らは応酬書法を断るわけにはいかない。なぜならこうした需要に応えることは社会的責任でもあるためである。増大する需要を満たし、さらに書作品の芸術的品質を一定水準に維持するためには、個々の作品の制作時間を短縮するよりほかない。このような背景を踏まえたうえで、書写効率の向上について正面から解説を加えるべきであろう。

五、人口増加の書法に対する影響

前章まで、清代晚期官僚の日常生活における日課としての習字、応酬書法の中でもっとも流行した形式や書写量、書写効率の向上のための方法について検討してきた。以下、二つの問題をさらに分析してみたい。一つは、清代晚期の官僚がなぜこれほど多くの字を書いたのか。そして、その中でもなぜ対聯と扇面がこれほど多数を占めたのか、という点である。前者の問題は人口増加の速度と関係があるろう。また、後者については扇対という形式に関連する。

一般的に、康熙年間（一六六二—一七二三）以降、相対的に平和な環境下では、街には稲が植えられ、北米よりもたらされたトウモロコシや落花生、ジャガイモなどの穀物が普及して中国の人口は増加の一途を辿ったといわれている。乾隆年間（一七三六—一七九六）に至ると二億人を突破し、道光年間では四億三千万人にまで激増したといわれている。⁽⁹⁵⁾この後、太平天国、捻軍や回民蜂起などの戦乱が続き、さらに天災による飢饉の影響により減少することもあったが、基本的な人口はすでに増大し、清代中期以前をはるかに

上回る数になっていた。⁽⁹⁶⁾これらの人口数は現代社会ほど厳密な統計的数字ではないかもしれないが、乾隆年間以降、人口の増加が加速していったことは学会の共通認識といえよう。

なぜ、人口の増加が官僚の応酬書法の増加に繋がるのであろうか。もし識字率が人口の増加後も大きく変化しないのであれば、書法に長じた地方官僚や名士たちが人口に比例して増加した分の書写を担うことになるのではないだろうか。事実、各地方における能書の地方官僚や文人らは、当地の需要に応ずるべく書作に励んでいた。楊葆光（一八三〇—一九一二）の『訂頑日程』⁽⁹⁷⁾をみると、人に依頼された扇対を書くことは書画に長じた彼の日常的な活動であったことがわかる。楊葆光は龍遊・新昌の知県を務めたがその地位は決して高くはない。なお、彼の日記に記される扇対の数量はかなり正確であったと考えられる。彼の書画の評判は当地においては高かったであろうが、彼の扇対の書写量は前述の高級官僚には遥かに及ばない。つまり、人口の増長の速度に比例して高官や著名な書家の書写量が増えるとは限らない、ということになる。すなわち、人口が五パーセント増加したら、著名な書家の書写量は五パーセントをはるかに超えて増えるのである。なぜなら、人々は評判の高い書法家や高官官僚の書を求めるのが常であるためである。

一日に百余りの対聯を書いていた何紹基を例に挙げてみよう。錢松氏の考察によれば、何紹基の書作の多くは京師の友人からの依頼、あるいは郷試を主管した地の人々や、道中の人士や友人の求め、または故郷である長沙の親族らの要請に応じたものである。⁽⁹⁸⁾錢松氏の観察は本論のいくつかの観点とよく合致する。在京の官僚が書を大量に書くのは、都にいる書法を愛好する官僚からのみならず、各地方から都にきた官僚の人士や子弟らも中央官僚の書を求めたためである。何紹基は福建、貴州、広東の郷試を主管したが、人口

の増加に伴って挙子の人数もまた増え、主たる試験官の書を求める人も増加した。しかも、故郷の親族や友人のために字を書くことは成功した官僚にとって避けることのできない社会的な責任であり、故郷の祖先の名を上げる機会でもあった。

多くの遠方に向いた官僚らは自分の書を故郷に送り、故郷の祠堂や廟宇、学堂や商店に用いさせ、あるいは親族や友人のためにも書き、あるいは家中に置いておき必要に備えていた。このような例は少なくない。左宗棠（一八二一—一八八五）は同治九年（一八七〇）閏十月十六日に子の孝威と孝寛に宛てた書簡で「最近書いた「徐太常師碑」はとても筆力が強い、今二十枚を同封するので、よくしまっておきなさい。人に贈るのであれば、また連絡しなさい。ただし、あまり多いと無理です」と記している。⁽⁹⁹⁾一八八六年、呉大澂は吉林に赴き、ロシア官僚と中国ロシアの境界を策定していたが、彼の吉林滞在時の日記『皇華紀程』には彼がその時期に八十あまりの対聯（ほぼ大半は篆書の対聯）を書いたことが記されている。⁽¹⁰⁰⁾呉大澂は光緒十二年（一八八六）五月二十八日、吉林から兄である呉大根へ書簡を出しており、「五月二十六日、二十七日、前後して篆書の対聯を二十副、篆屏両堂を送りましたが、何日に届くかわかりません」と書いている。⁽¹⁰¹⁾これらの対聯もまたおそらく、蘇州の家中に備え置かれ、必要があれば親族や友人への贈物に使うこともあったであろう。光緒十七年（一八九二）十月一日に、親の喪に服していた呉大澂は痔疾の悪化のため武進の孟河の医者にかかっている。道中で甥に当たる呉訥士（大根の子）に宛てた手紙には「荷物の中には小さな対聯が一副あるだけです。客庁の後ろの部屋に七言の対聯が二副あるので、念劬に渡して持って来させるか、あるいは郵送人に渡しても良いです」とある。⁽¹⁰²⁾この対聯は病を診断してもらった時の贈物と推測され、また、呉大澂が途中で揮

毫できなかったのは、おそらく痔病の発作が原因であろう。⁽¹⁰³⁾この時は家中に備蓄されたものが使われたのである。

社会的地位の高い書法家（特に高官）や著名な書家の揮毫量が、人口増加の割合以上に増えるもう一つの原因として、書法の移動モデルの作用が挙げられる。すなわち、書法の移動モデルは三種類に大別される。一つは、比較的対等な移動、一つは下から上に対する移動、そしてもう一つは上から下に向けての移動である。清代晩期、蘇州に居住した著名な收藏家、呉雲（一一八一—一八八三）は勅方錡（一一八一—一八八〇）に宛てた書簡中で「古人が集えば、必ず互いに翰墨を留めて、切磋琢磨の一助とした」と記している。⁽¹⁰⁴⁾これは対等な移動であり、友人同士でよく行われた。曾国藩の日記にも、彼に書画が贈られる記事があり「雪琴が贈ってくれた書、画、扇三十柄を沅弟に送りその苦勞に報いた」という。⁽¹⁰⁵⁾雪琴とは、彭玉麟（一一八一—一八九〇）を指し、湘軍水師統帥であり書画に長じていた。彼もまた中興の名臣と称され、曾国藩と同等の地位にある。また、曾国藩は「莫子偲が来て長いこといた。篆書を八副書き、贈ってくれた。一幅には一二六字書いてある」とも記す。莫友芝はかつての幕友であり、地位は曾国藩よりもかなり低い、その学術的な名声は高く特に篆書の評判が高かった。曾国藩とは常に書芸を研鑽しあう間柄であった。逆に莫友芝が曾国藩に書を求めることもあったようで、曾国藩の日記には「莫子偲が古い宣紙に「五箴」を書いてくれと頼むが、暑くて書ききれなかった」「莫子偲に頼まれた「五箴」を書き上げた。一つ跋を付け、約百余字となった」とも記しており、彼らの対等な交流をみることができる。⁽¹⁰⁶⁾何紹基も曾国藩の良友であったが、彼は高官の家庭の出身であり自身も翰林に出仕したことから、当時その書名はきわめて高かった。曾国藩も十分に敬意を払い「丁公が何子貞（何紹基）の手巻を持って来た。その精力

の充実ぶりに感服した」と記している。⁽¹⁰⁷⁾ これもまた友人間の対等な交流と見なせよう。

このような対等な移動に比べ、下から上への移動は一般的に少ない。翁同龢の日記には彼が人からの依頼により書作する記述が散見されるが、逆に人から書が贈られてきたという記述はきわめて稀である。光緒十八年（一八九二）十月二十九日、彼は「楊子通からの荷が届いた。楊は墨二匣、筆二匣、自書の隸対一副を贈ってくれた」とある。⁽¹⁰⁸⁾ 楊子通とは、楊儒（？—約一九〇二？）を指す。一八九二年に彼は道台に任じられているが、地位は翁同龢よりも低い。光緒十九年（一八九三）五月二十九日には「江建霞が扇を二柄贈ってくれた。その画と篆書はみなすばらしい」と記している。⁽¹⁰⁹⁾ 江建霞とは江標（一八六〇—一八九九）、蘇州の人、光緒十五年（一八八九）に進士となり、翁同龢とは同郷人であり門生である。彼は翁同龢に書画扇を贈っているが、これは師に対して教えを請っていると捉えてよからう。ここに挙げた二例は下から上への移動に当たるわけだが、日記に記されなかったという可能性を含めても、このような移動は決して多くはなかったと推測される。

清代晩期の官僚の日記や書簡より、書法は上から下への移動がより多く、数量的にも下から上への移動を遥かに超えるとみてよからう。いわゆる「上から下へ」というモデルは、官階の高い人から低い人々へと、書名の高い人から低い人へと書法が移動することを指す。よって、この両者が結びついた能書の官僚は膨大な量の書を書くことになるのである。

上から下への移動の例は枚挙に遑がないわけだが、清代晩期の李鴻章の例を紹介したい。李鴻章は特別に書名が高いわけではないものの、高位にあり彼の書を求める人が多かった。呉大澂はかつて李鴻章の助手を務めていた。友人である呉承潞（慎思、呉雲の子、一八六五年の進士）は呉大澂に李鴻章の

墨宝を自分の代わりに求めるように依頼した。呉大澂は手紙の中で「合肥（李鴻章）はすでに東京の挨拶をすまし、明日には都から出行します。十六日には津に戻ってくるでしょう。代わりに頼んではみませんが、力になれるかどうかわかりません。北洋の公務に毎日追われ、最近では以前のように精力旺盛ではありません。書を求める人も続々と詰め掛け、紙束はうす高く積み上がっております。墨宝を求めることは容易ではなさそうです」と記している。⁽¹¹⁰⁾ 李鴻章は日頃多忙を極めており、夏季に集中して書作し文債を返していた。張佩綸（李鴻章の女婿）は友人に宛てた書簡の中で、李鴻章が依頼された対聯を書くことについて「合肥（李鴻章）は毎年必ず楹聯を一、二ヶ月書き、夏が終わってしまうのです。光緒十四年（一八八八）以後は病のため中断しました。家人は彼が一气呵成に書き、汗が止まらない様子をみて、過労を心配し中止するように勧めたのです。去年の九月、兄の旧居である明致書屋の看板は先君のつけた齋名であるため、必ず自ら書きたいと言い、手が鈍っていることを恐れて、腕をふるうこと十余日の後によく書きました。楹聯をまた書きはじめ、十一月初めには書き終えました。新吾はたまたまこれを見かけました。今年はなお書興があり、紙を買い書の奉贈を求めています。⁽¹¹¹⁾ 書かなければそれまでですし、書けば一気に書くでしょう」と記している。

六、なぜ扇対がこれほど多いのか

前章では、清代晩期の官僚たちが膨大な書作を残した背景やその要因について考察してきた。では、次に日常生活において最も普及していた書法の贈物が条幅や冊頁ではなく、なぜ扇面や対聯であったのか検討を加えてみたい。これは扇対という形式の特徴に関係がある。

明代中期の呉門（蘇州）の諸子の書簡中にはすでに扇面についての言及が

確認でき、現存する書画扇もまたそれを証明しているように、「少なくとも十五世紀より、摺扇はすでに上層階級の日用品であり、暑さを凌ぐ送風の機能以外に高雅な身分を示す符号にもなっていた」と言える。⁽¹²⁾ただし、呉門の諸家には、対聯の揮毫に関する記録（この時はまだ冠婚葬祭に對聯を送る習俗は出現していない）は見えない。明代晩期の多くの日用類書には多様な種類の對聯に関する記述があるが、徽州の文物商、方用彬（二五四二—一六〇八）に宛てて明人が送った七百通余りの書簡（ハーバード大学燕京圖書館所蔵）のうち、對聯へ言及したものはわずか三通のみである。そして、それらも門聯や楹聯と思しい。これにひきかえ、これらの書簡に書画扇の語は頻出している。⁽¹³⁾明代晩期に中国に來たイタリア人宣教師利瑪竇（一五五二—一六一〇）もまた、当時の社会において「扇子は友情と尊敬を象徴するものであり、もつともよくやり取りされる贈物であった」と指摘している。⁽¹⁴⁾

對聯が扇面に代わって応酬書法の最流行形式となるのは、おおむね清代中期以降のことである。方聞氏は、對聯は對仗の文字と對稱の視覚形式を備えた礼儀性の強いものであることを指摘する。⁽¹⁵⁾礼学が清代に復興し、十八世紀以降、儒学思想の主軸となったことは先学により詳論されている。礼学の隆盛と連動するように清代書法もまた重厚端莊へと傾き、その好尚が對聯の特性とよく合致したのであろう。清代初期には明代晩期に流行した書風の影響から傅山（一六〇七—一六八四、または八五）、八大山人（一六二六—一七〇五）らはみな草書の對聯を書いた。ただし、清代中期以降は篆、隸、楷書の對聯が次第に増えてくる。これは礼学の復興とまさに並行しており、偶然の一致というわけではなからう。また、對聯は建築とも密接な関係をもつ書法形式であり、それは明代晩期の文震亨の『長物志』や、清代初期の李漁の『閑情偶寄』中に論じられる通りである。このような書法形式は木造建築を裝飾す

るのに非常に都合がよい。曾紀沢が喪に服するため長沙に滞在した時には、道觀、廟宇、学堂、官署、祠堂、商店、城隍廟、戲台などのために多くの對聯や看板、扁額を揮毫している。⁽¹⁶⁾これらの建築物の社会的な機能は異なり、また、文化、宗教的な意味合いでも異なる性質を有するが、建築の形式上は類似しており、書法の使用方法も基本的には同じである。⁽¹⁷⁾このほか、冠婚葬祭においても對聯は贈られ、對聯の数量はすでにかなり大量になっていた。

ただし、清代對聯の中で主流を占めるのは、門聯、楹聯、壽聯や挽聯などの実用性の強い對聯ではない。より鑑賞性を備えた紙絹等の柔らかい材料に書かれ、表装された對聯である。門聯、楹聯、壽聯や挽聯は用途が特定されている。たとえば楹聯は木板に刻された後、柱に掛けられれば一般的に再び動かされることはない。一方で、表装された紙や絹の對聯は単独で掛けてもよく、また絵画の両側に配置してもよい。文人は何種類もの對聯を所有し、その時の感興の赴くままにいつでも對聯を掛け換えることができた。

清代晩期の七言聯は、単条のサイズが一般におよそ一四〇×三三センチメートル、八言聯でおよそ一七〇×三五センチメートル、今日の四尺から六尺對開のサイズに近い。⁽¹⁸⁾對聯は二枚の細長い条幅の組み合わせであり、上聯と下聯を掛けるには一定の距離が必要になる。表装後は四尺中堂よりも大きなスペースを必要とし、十あまりの大字と上下の落款を合わせるとかなり広い空間を占めることになる。もし、絵画であれば梅蘭竹菊などを画題にして大写真画を描くことで、かなり短時間で大サイズの作品を完成させることが可能になる。ただし、それでも對聯を書くほどには速く書けないであろう。また、主要な客間に掛けるものは芸術品であると同時に、道徳的な訓戒の色彩を帯びることが常である。對聯であれば文字の助けによりこの要件を満たすことができる。對聯は主に楷書や行楷、隸書、篆書などで書かれるが、章

法もさほど難しくはない。字間は均等でよく、両条は対偶にすればよい。もし、同様のサイズの条幅か中堂を書くならば、字数は多くなり、行書や草書で書くとスピードは速くとも、章法の要求は高くなり対聯ほどの成功率には及ばない。もし対聯の片方を失敗しても一枚書き直せば良いだけで、すべてを書き直す必要はない。ところが、条幅や中堂で漏字や誤字があれば補った点を打ったりしても良いが、結局はそれが瑕疵となろう。章法のうえで一度不調和が起きれば全体に影響し、作品の質が落ちて結局は人前には出せない廃品となってしまうこともある。清代中期以降、碑学書法の高潮に及び、書法家は好んで篆隸を書いた。篆隸は重厚感があり、また礼儀性も備えているため対聯には実にふさわしい。呉大澂の日記にも、九十パーセント以上は⁽¹¹⁹⁾大家の対聯を書いたとの記載があり、それは現存作品により裏付けられる。

挿図3 贈邱玉符書画扇 呉大澂(1883年) 個人蔵

篆隸の書写速度は行草よりは遅いものの、対聯なら字数は少なくすむ。よって、篆隸対であればさほど時間を消耗することもない。これらの要素が重なり、対聯は清代晩期において応酬書法の形式として歓迎されることになったのであろう。

清代晩期では、扇面は対聯と併せて「扇対」と称されるが、書法形式上では両者は鮮明な対照を示している。対聯は公共性と礼儀性を備えているのに対し、扇面は個人的であり娯楽性が強い。対聯は大きく(合わせる)と八平方尺以上、扇面は小さい(二平方尺前後)。対聯は規格が一樣であるのに対し、摺扇は個々の形が異なる(宮扇にも多様な形式がある)。上は広く下は狭い弧形のため、収めたり広げたり自在であり、こうした形式の影響を受けて、形状は不規則で長短大小も様々である。対聯は壁にかけて見るが、扇面は携帯するものである。対聯は距離をとって鑑賞するのに対し、扇面は手中で愛玩し、扇骨に意匠を凝らしたものは感触を楽しむこともできる。通常、一副の対聯では一種の書体(草書は少ない)を用いるが、扇面では一種の書体(草書も可)でも複数の書体でもよい。対聯は一人の作者によって完成させられるが、扇面では二人、またはそれ以上の合作もある(挿図3)。扇面は、一面は書、一面は絵画、あるいは同一面に書画の両方が配されることもあり、視覚上より豊かである。文学方面においても扇面はより多様であり、長歌や短詞、小品でも長篇でもよく、字は少なければ二十余りから、小字の細密なものでは数百、多いものでは千字以上を納めることも可能である⁽¹²⁰⁾。扇面は老若男女誰もが持つことができ、広範囲の人に用いられた。扇面について、張充和氏(一九一三年-)が若き日、蘇州の昆曲の集會に参加した際の記憶を紹介したい。会場の各々の曲友らは一柄の書画扇を持っており、扇子は人々の手を次々と渡し回されて鑑賞、愛玩された。あたかも二、三十人の曲會

は一つの小さな書画鑑賞会にもなっていた。次の集會時には、曲友らは別の扇子を持ってきて、また新たな扇子を展覽したという。⁽¹²¹⁾こうした風気は清代晚期より踏襲され続けたのであろう。一人の文人はかなり多くの扇子を所有していたと考えられる。清代晚期における扇面の使用量は対聯には及ばないかもしれないが、日常生活の中の贈物としてかなり普及していたことがわかる。

扇子は優雅であり書画に適した物であるが、対聯に比べ、扇子への揮毫は章法のうえではるかに難しい。摺扇でも宮扇でも字数によってレイアウトを計算しなければならぬ。摺扇では通常、一行を長く書くこと次行は短くするが、書写中に不注意で短い行を予定より長く書いてしまうと、章法は破綻してしまふ。さらに扇面はひとたび間違えれば改めることはできず、廃棄するよりほかない。⁽¹²²⁾そのため、扇面の書写効率是对聯よりも低いといえよう。しかし、対聯と比べて扇面は携帯できるばかりか、視覚的な豊富さと精緻さでは勝っており、社会身分の証明にもなる。まさに清代初期の張潮（二六五〇—？）が「手中の扇をみれば、その人の雅俗、その人の交遊も知ることができる」と述べている通りである。⁽¹²³⁾

七、清代晚期官僚が書売らないことについて

清代晚期の官僚は膨大な書を残したが、日記や書簡などに彼らが書売ったという記録は確認できない。翁同龢は光緒十六年（一八九〇）十月十七日に「羅大春（福建の総兵、号は景山）から別敬を受ける。扇一張、条幅四件を贈った」と記している。⁽¹²⁴⁾ここでいう「別敬」とは礼金のことを指し、実際のところは銀（額は不明）のことである。翁同龢は一張の扇と四件の条幅を返礼として「贈る」と記していることから、両者間の贈答は売買交易ではないことが明らかである。

張徳昌氏は李慈銘（一八三〇—一八九四）の『越縵堂日記』より、彼が京師の官僚であった時期の収入と支出について非常に具体的な統計をとり、分析した。収入面では、他人からの依頼により、行述、墓誌銘、碑文、寿序などを撰述し、それぞれ三十、四十、五十、八十、百兩などの潤筆料を受け取っている。⁽¹²⁵⁾しかしながら、書売った収入は見当たらないのである。京官の収入は決して高くはなく、応酬書の依頼は多い。たとえ各種の贈物があったとしても、李慈銘の生活は裕福とは言えなかったであろう。時には借金に追われる日さえもあり、かなり逼迫していたようである。しかし、それでもなお書売って収入を得たという記録は見られない。では、李慈銘の書が売るに足らないものかという点、そうではない。一般に、文人たちは書法の研鑽を積んでおり、一定の技倆を備えている。現存する李慈銘の墨跡をみれば、彼の書が特に出色の出来とはいわないまでも、優れたものであることは否定できまい。さらに、彼は京師で高い文学的名声を得ており、彼の書もまた名人の墨跡と目されていたはずである。

先にあげた楊葆光の『訂頑日程』の日記中にも、彼の日々の収入と支出がきわめて詳細に記録されている。しかし、ここでも人のために揮毫した書作による収入の記録は見出すことができない。もしこれが特例でなければ、おそらく地方官もまた書は売らなかったことが推測されよう。さらに清代晚期政界では書売するような風潮がなかったと考えられる。

しかしながら、書売ったという記録もないわけではない。かつて上海道台に任じられていた応宝時（二八二一—一八九〇）の幕僚である戴丙榮が呉大澂に宛てた書簡の中で、「莫子愚（友芝）徴君は経学詩文の根本を備え、篆隸の学については百年来海内無双といったようだ。近々蘇州に来て会見するので平翁は宣紙を十分に準備しておくように頼んでおく（七言聯では四洋、

友人については「代金不要」と記している⁽¹²⁶⁾。友人からは代金をとらず、友人でなければ一副の対聯に四塊の銀元（およそ二両半の銀）が必要である、という。莫友芝はかつて曾国藩の幕府に客居し、後には曾国藩のために江南書局を監督して経史の校勘を担当する職にあった人物であり、どのような官僚であったかは言うまでもない。

また、何紹基は退官後、長沙、揚州、蘇州の書院や書局の仕事を主管したが、彼も書を買った。同治四年（一八六五）三月二十五日に長沙の家への書簡に「上海に五十日滞在している。字を書いて報酬を得て、所得が無いわけではないが、信頼できない。預けた銀行は突然閉まってしまい、それを好き勝手にするようだ」と記している⁽¹²⁷⁾。四月七日の長沙への書簡では「人は皆、字を書いて売ることを勧める。老年の窮状に、既衰の戒めを犯さないわけにはいかない。書作の仕事は気が進まないが資金は速く集まらず、滞留している。近日中には人が紙を持つてくるのを止めさせる。机上の残債を片付けて、浙江に行くべきなのでしょう」とある⁽¹²⁸⁾。またほぼ同年の六月に何紹京への書簡では「今回の上海での書の報酬で旅費が足りそうです」とも記している⁽¹²⁹⁾。これらの引用資料から察するに、何紹基の晩年の暮らしは決して楽なものではなく、また書売り始めたようである。ただし、頻繁ではなかったようだ。呉雲が何紹基に宛てた手紙に「南中の友人らは兄の書を求める者がとても多い。皆遠方であり届きにくいことを心配している。ひとたび潤筆料の話になると、皆とても慎重になる。吝嗇というよりほかない。可笑しいことである」とある⁽¹³⁰⁾。この手紙が書かれたのはおおむね同治六年（一八六七）頃であり、何紹基は長沙の書院で講義をしていた。仮に、呉雲が何紹基を助けて江南一帯で書を買っていたとしても、やはり士人の間ではなお、書を買っても書は買わないという習慣があったのであろう。

同治十年（一八七二）二月二十九日、京師の翰林院の職に任じられていた呉大澂は家兄の呉大根への書簡において、家中の祠堂の対聯の揮毫を何紹基に依頼したことに言及し「菱舫の祠の扁額はすでに他の人に別の書を頼んだ。子貞先生（何紹基）には聯を二副書いてもらいたいのだが、養閑氏に依頼の仲介をお願いしたい。養閑氏には対聯の紙を準備して届けるべきであろう。輯庭の手紙に同封し、贈物も準備しておくように。渡さなくとも、郵送しておけばよい」と記している⁽¹³¹⁾。呉大澂がこの手紙を書いた時、何紹基は揚州、蘇州にて書局の事務を主管していた。呉大澂の外祖父の韓崇（？—一八六一）は何紹基の友人である。そのため呉家では何紹基への贈物を準備し、蘇州の德行高く、名望家である潘曾瑋（号は養閑居士、一八一八—一八八五）に仲介を依頼している。これ以前に何紹基はすでに上海において書を買っており、呉雲も江南一帯で何紹基の書を買ろうと試みていた。呉雲の弟子である呉大澂がこうした事情を知らなかったことはありえない。それでも、贈物を準備して書を買っている。もし書を金銭で買おうと思えば、呉家は買うことができたであろう。ただし、外祖父の古い友人の書を金銭で買うことは体面に関わるというだけでなく、かりに呉大澂がお金を払おうとしても、何紹基は受け取らなかったであろう。これは莫友芝と同様に、友人とは書の売買はしないということである。

近年進められている文人の潤例に関する研究により、書を買う際の価格基準である潤格を示すのは、おおむね出仕していない文人や官僚の幕僚、またはリタイア後の官僚であることが明らかにされた⁽¹³²⁾。明代晩期の李日華（一五六五—一六三五）が自ら定めた潤例の第一句には「私は林居して暇ができた。士友の書を求める者が集まってきている。戯れに基準を定めてみよう」とあり、辞職後にはじめて書を買ったことが明確に示されている⁽¹³³⁾。無論、在

任中の官僚にも書を買った者がいた可能性は排除しきれないが、おそらくそれは少数であろう。潤例を公示した可能性もきわめて低く、その規模も小さなものであっただろう。

では、なぜ官僚らは書を買らなかったのでしょうか。その原因は多方面に求められる。まず、現職の官僚が書を買らないというのは、官界に長く行われてきた伝統といえる。この伝統は、官を得た者の中国社会における地位や収入と関連がある。張仲礼氏は中国古代官僚の主要収入の統計を取り「若干の推測も含まれるものの概算してみると、伝統的中国古代社会において官を得ることが最良の蓄財方法であるという考え方は実証された。官僚の生涯では本人だけでなく、その家郷もまた同様の利益がもたらされる」と指摘している。⁽¹³⁾

これ以外に、おそらく他の要素も考えられよう。いまだ少し官僚が潤格を開示し、書を買うことにより現れる問題について検討していきたい。日常生活において書法は頻繁に使用されるようになり、寿聯や挽聯などは特定の場面において必須の贈物となった。この場合に贈られる書は売らないだけでなく、対聯とともに寿礼や香典として銀も送らなければならない。では、なぜ寿序や墓誌の撰文には潤筆料が支払われたのだろうか。寿序は誕生日に人を招いて撰述してもらい、そこで潤筆料を払う。門生は師に礼物として寿序を書き祝杯を挙げるが、金銭を受け取ることはない。友人同士の場合も寿序は寿礼とされ、代金はとらない。しかしながら、墓誌の撰文者に対しては潤筆料が払われる。文章を書くことは書の揮毫よりも時間がかかるという点は大きな相違点ではあろう。しかし、日常の応酬書法の量がこれほど増大した時、これらの代金をどのように一つ一つ徴収できようか。もし、官僚が書を買うのであれば、その料金基準をどのように定めるといえるのであろう。官階の高

低や書法水準の上下によればよいのだろうか。一品の官僚の潤格は二品より高くするともいえるのであろうか。

書写の実用性と必要性もまた書が売買されることに適さない原因の一つであろう。ここには二つの問題がある。一つは、本論で最初から指摘してきた現象であるが、書写は日常生活で欠くことのできない交流の道具である。文人らの書簡や詩稿、帳簿、薬の処方箋、メモや記録、日記などすべては毛筆が用いられた。日常の書と創作的な書も筆記具は全く同じであり、実用と芸術の境界が曖昧なのである。書と絵画の異なる点は、まさに日常での必需性にある。絵画が廟堂を装飾するように、一面では実用性もあるが、一般人ひいては文人にとって、絵画は日常生活中で毎日必要なものとはいえない。一方、文字の使用は不可欠である。文字を書かなければ、一帝国の政府組織が有効に運行される術はない。同様に、医者や処方箋を出さなければ、病人は薬を手に入れることもできない。書名の高い文人らの日記によれば、処方箋までもみな収蔵価値と市場価値のある「芸術品」にもなりうる。文人らがひとたび筆を動かせば書法の「創作」になるという。もし、書法が徹底的に商業化されてしまえば、処方箋を書いても書法料金を徴収できるという事態も起こりうる。二つ目には、書法に長じた文人は長年の練習を経てようやく深く深い造詣を得るに至るのであるが、通常、一件の書法作品はかなり敏捷に揮毫される。書を求める人にとっては、巨大な長編作品でない限り、自分の求めている作品がそれほど揮毫者の負担にはなっていないように感じられるのかもしれない。一副の対聯を求めても、大筆を振るうわけではなく、十数文字を書く程度であり、どれほどの時間がかかろうかと思われてしまう。しかし、実際には書作依頼が殺到する状況下であって、文人らの負担は非常に重くのしかかっていたのである。

また、官僚らが俸禄を受けつつも、さらに収入を増加させるために書を書くという行為は、単に彼らの体面を損なうというのみでは済まないであろう。清代初期の書法家である傅山（一六〇七—一六八四または八五）が嘆いて「文章は小技である、道において尊ばれない。ましてや書写はなおさらだ。わが家では六、七代続けて書嗜んだが、皆人のために書くようなことはしなかった。私に至り、初めて書を買って求めようとするような俗物との応接に苦しんでいるのである」という⁽¹³⁵⁾。傅山は官に就かなかったが、彼にとって書を書くことは遺憾なことであった。ましてや、官僚であればなおさらであろう。かりに潤例を公示した文人、たとえば莫友芝らも、友人からは金銭を徴収しなかった。あくまで潤例は見知らぬ人に向けてのものである。このような習俗は清代末期から民国初期まで継続した⁽¹³⁶⁾。書を書く文人も、依然として商品化されていない作品をかなり保持していたのであろう。もし、書法作品がすべて商品として扱われたのであれば、それは文人文化に重大な衝撃を与えることになる。旧時において、友人間で交わされた題跋や酬唱は、互いに切磋琢磨しあう文化的交流であり雅事でもあった。もし書が金銭で授受される商業活動になってしまえば、多くの文人たちの交流活動そのものにも影響を与えることになるであろう。

雷德侯氏は中国書法について論じた文中で、書法には精英階層の団結力を維持する機能があることを指摘している⁽¹³⁷⁾。これは非常に示唆に富む見解である。清代晚期官僚らの書写量の膨大さは、まさに自己の所属する集団の団結力を支えるものといえる。曾紀沢の光緒三年（一八七七）五月二十九日の日記には「眉生の二人の孫のために摺扇を各一柄書く。四体書は、とても緻密である⁽¹³⁸⁾」とある。李鴻裔（眉生）は曾国藩の幕僚であり、曾国藩より二十歳ほど若い、二人の関係はきわめて親密であった。当時李鴻裔は四十六歳、

退職後蘇州で閑居していた。李に子はなく、侄子の賡猷（？—一九〇二年）を嗣子とした。推測するに、李鴻裔の二人の孫は小さく、大きくとも十歳前後であったのだろう。しかし、曾紀沢は十分に意を尽くして「緻密」な「四体書」を書いた。このような類例は枚挙に遑がない⁽¹³⁹⁾。

では、翁同龢が衛兵、巡捕、僕役やその他の雑夫たちのために扇対を書いていたことはどのように解釈できようか。清代晚期には似た例が見られ、翁同龢のこうした行為は決して特例ではない。扇対は平常の給料以外に贈られる礼品であり、感謝の意を表すための物である。銀の支払いを少し減らし、扇対で充当したということではない。これは、官僚の礼品の使用範囲が拡大していく趨勢を反映しているのであろう。一方、礼品を受け取る側にとつては、扇面上に書かれた官僚の名前や落款にこそ特別な意義がある。なぜなら、官僚の書は商品ではない。書法の流通は互換、贈送、索求などから、流通範囲が拡大していったが、それでもなお限定的であった。一般的な身分の低い人々にとつては、仲介者を立てて書を求めることは不可能であり、官僚の職務に当たった機会に直接もらう以外に方法はない。扇対の贈物を手にできる人々はかなり限られていたのである。もし、書が売り物であれば、金銭の前では平等であるため誰もが購入することができ、官僚の書法作品が備え持つ「排他性」は失われてしまう。そのため、官僚らの書を書かないという行為が、精英階層の利益を保護することになっていたのである。まさに石守謙氏が文微明の礼品書法について論じた際に指摘したように、礼品書法はひとつの特定の社会集団の構成員間の関係を維持するために重要な作用を發揮したのである⁽¹⁴⁾。

これらの衛兵や使用人らに贈られた書がどれほど現存するか、今は不詳である（おそらく大部分には上款はないだろう）。よって官僚らが友人に贈った

書とこれらと比較するのは難しいのだが、そこには何かしらの区別があったのだろう。特に扇面は、対聯よりも明らかな区別が付けられたのではないだろうか。揮毫者は贈与対象との親疎、地位の高低によって扇面の字数や字体、内容、上款の語句などにおいて区別を設けていたと推測される。

八、索書——特殊な礼品経済

官僚が書を買らないのであれば、彼らの応酬書法は「礼品」と見なすことができよう。人類学研究の影響を受け、近年、芸術史研究者の間では芸術における礼品経済への注目が高まっている。もし、書法の贈与が標準的な礼品経済に属するのであれば、中国書法にも一種の研究に値する現象——「索書」がある。中国文学や芸術に類出する索和、索書、索画、索題については、文学芸術研究者はよく知る所であろう。先行研究において、高居翰 (James Cahill) 氏が早くこの現象を取り上げている。⁽¹⁴⁾ 高氏は、画家の生涯についての専論中で索取の現象に言及している。しかし、挙げられている例は職業画家と関連するものが多く、金銭と引き換えに画を求める例であり、本論で扱う非商品としての書を求める、索求とは性質を異にする。また、高氏は索求の仲介人の多くが営利目的を持つことにも触れている。しかしながら、書法を求める際、仲介人は通常、直接的な経済利益を得ようとしているわけではなく、往々にして一種の社会責任を果たそうとしている。そのため、仲介はある種の負担であり、決して好き好んでやることではない。索求書法は、中国の応酬書法中の一大ジャンルということに留まらず、人からの求めによって完成された書法作品が応酬書法中でも数量的に多数を占める。これは、一種のきわめて特殊な「礼品経済」といえる。⁽¹⁵⁾ 我々が通常いう「礼品」とは、いわゆる「贈物」や「プレゼント」を指す——当然、贈物を受ける側が相手方に「送

礼」を暗に要求する（時に賄賂に等しいこともある）ことも排除できないのであるが——自発的なものか否かはここでは問はず、表面上「贈物」という行為は、贈る側からの働きかけから始まる。しかし、索書においては全く正反対の構図であり、「贈物」を受ける側が公開的な索求という働きかけをすることから始まる。同輩と同僚の間での索求は、常に互いの尊重を基礎としており、どちらかが題字を求めるのは、詩詞唱和の索和と似ている。年齢の若い者や社会的地位の低い人が年配者や地位の高い者に書を求める時は、仰慕の意味合いも帯びる。官僚は書を買らないため、書を求める人は金銭的な心配をしなくてもよい。これもまた、索書者が増加した一因といえよう。

また、仲介人を通さない直接的な索求もあり得る。一八七〇年前後、翁同龢は仕事の後、好んで城内の瀟洒な宿屋に泊まっていた。ある日には「酒家で扇子に書を求められることはきわめて多い」と記している。⁽¹⁶⁾ 彼が宿屋に料金を払ったのかは不明であるが、宿屋が彼に住む場所と諸々のサービスを提供したことは疑いない。店からのサービスを先に受けた手前、この種の索求を翁同龢は断れなくなったのであろう。これは、一種の交換ともみなすことができる。

索求は誰かを仲介して書を求めるのが常であるが、書を求める人が書者と知り合っていないこともありうる。先述の通り吳承潞は吳大澂に仲介を頼んで李鴻章の書を求めていた。間接的な索求者が遠方に住むため即座に返礼できない場合は仲介人がお礼を準備することとなり、索求者は仲介人への義理を欠くことになる。仲介人が代求を引き受けてくれるか、またはどのように代求するか、それが実現できるか否かは仲介人と書者の密接度合いにかかっている。さらに誰の代わりに求めるのかという点も重要だ。相手に金銭を払って物を買うわけではないので、書者は索求のすべてに応じる必要もな

いのである。呉大澂が呉承潞に宛てた手紙の中で李鴻章の様子について「書を求めるものが引きも切らず、束がうずたかく積み上がっている。彼の墨宝を求めるのは難しそうだ」と書いているのも、このような理由によるだろう。

ただし、特殊な「礼品経済」として「索書」の現象を描写することは、これらの活動を一種の功利的な「経済」活動と見なすことになってしまいかもしれない。このような視点は、この活動そのものが備える文化意義を軽視することになる。また、自己の墨跡を「商品」ではなく「礼品」として堅持することは、まさに市場経済の衝撃を受けた社会生活方式に対する一つの抵抗手段であり、官僚の行為を市場の赤裸々な金銭遊戯のルールに囚われないようにさせることを可能にする。礼尚往来(訳者註15)の観念にあつて、時に索書者の返礼品は象徴性を帯びることがあり、必ずしも対等な価値をそなえる必要はない。翁同龢が帰郷した際に、親族や友人のために書いた対聯、あるいは護衛人の為に書いた対聯は、象徴的な礼品ですら手に入れることはできないものと言えよう。こうした索求と応酬の文化を維持することは、一社会に定着した習俗が前提であり、さらに官僚たちが自覚的にこれらの慣例的な意識や潜在意識を保持していくことにかかっている。官僚たちにとっては、書を売ることには法に触れるわけではなく、たとえ物議を醸したとしても天道にもとるわけではないため、これは彼らの面子や羞恥心が大きく影響する。個々の官僚が慣例を遵守し羞恥心により自己を律して、書法を利潤の道具としないのであれば、彼らの書の不売行為は営利を追求する市場経済とは区別されるのである。十九世紀後半において、絶対的多数の政府官僚にとって芸術的創作は一種の非職業的活動であり、市場の外にある文化芸術活動であつたといえる。市場はいまだ彼らの生活には浸透しておらず、支配的な力量となつていなかったのである。⁽¹⁴⁶⁾

官僚の書法は商品ではなく求められる「礼品」であつたため、官僚たちは日常生活中で大量の書法を書く必要があり、それは日常生活の各方面における芸術の鑑賞と使用を広く浸透させることになった。このようなことから、数多の戦乱を経てもなお、多数の書法が残されているのである。

結語

本論では、咸豊より光緒年間に至るまで、すなわち十九世紀後半における清代晚期官僚の生活について論及した。当時期、すでに海禁は開かれ列強が侵入するようになり、中国には重大な変化が起きていた。ただし、中国の官僚の文化生活には、西方の影響はそれほど深く及ばなかった。この時期「古典的な芸術形式や文化の含蓄を探索し、細微な遣詞造句の妙を玩味すること」は依然として「知識を表現する主要な方式であり社会権力の核心的な内容」であつたのである。⁽¹⁴⁶⁾ 文官らはおしなべて学書に励み、書法の芸術言語に通暁しているため、人の為に書作した官僚はみな、自分の書が公衆の目に触れる際には、書法を修養している人々による評価にさらされることを意識していた。そのため、李鴻章は父親が生前に命名した齋号を書くために十日余りも練習したのである。多くの官僚らが同時代の何紹基や翁同龢の行草書、呉大澂の大篆を一流と激賞するのは、彼らが不断の研鑽を積んでいたためなのである。

十九世紀の七十年代から二十世紀初頭までに、曾国藩、潘祖蔭、曾紀沢、呉大澂、翁同龢が相次いで世を去つた。そして、一九一一年には清朝が滅亡した。書をよくした清末の官僚である沈增植（一八五〇—一九二二）や、曾熙（一八六一—一九三〇）、李瑞清（一八六七—一九二〇）らはみな何紹基がつて書を買つた大都市上海にやってきて、潤例を掲げて書を買つた。しかし、

これは些少な変化にすぎない。一九〇五年、中国は千余年続いた科挙制度を時宜に合わないことを理由に廃し、新しい選抜体制を導入して教育の改革がなされた。こうして千百年にも及び継承されてきた文人階層は歴史の彼方に去ることになった。そのみならず、二十世紀初頭には、硬筆（ペン、鉛筆、ボールペン）が輸入され日常的な筆記具になり、書法と日常生活の距離は次第に遠ざけられた。清代晩期の最後の一、二代の官僚の日常生活における書法活動の研究は、大きな変化の渦中にあつた中国社会の精英文化生活を検討する際に、ひとつの重要な視点となるだろう。⁽¹⁷⁾

註

- (1) 応酬書法に関する研究は主に明清の両時代に集中している。主たる研究として以下のものが挙げられる。Shih Shou-ch'ien, "Calligraphy as Gift: Wen Cheng-ming's (1470-1559) Calligraphy and the Formation of Soochow Literati Culture," in Cary Y. Liu, Dora C.Y. Ching and Judith G. Smith eds., *Character and Content in Chinese Calligraphy* (Princeton: The Art Museum, Princeton University, 1999), pp. 254-283. 白謙慎「從傅山和戴廷栻的交往論及中国書法中的応酬和修辭問題」(『故宫學術季刊』第十六卷第四期、一九九九年夏、九十五—一三三頁・第十七卷第一期、一九九九年秋、一三七—一五六頁)・Qianshen Bai, "Calligraphy for Negotiating Everyday Life: The Case of Fu Shan," *Asia Major* New Series 3, vol. 12, no. 1 (1999), pp. 67-125; Craig Clunas, *Elegant Debts: The Social Art of Wen Zhengming* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2003)・何炎泉「張璠図(1570-1641)行草書風之形成与書法応酬」(『台湾大学美術史研究集刊』第十九期、二〇〇五年九月、一三四—一三六頁)・吳国豪「足下負書名, 安能負書乎?—王鐸書法応酬研究」(邱振中主編『書法与中国社会』北京、北京師範大学出版社、二〇〇八年、三〇五—三一九頁)・柳揚「応酬—社会史視角下的清代士人書法」(莫家良・陳雅飛編『書海觀瀾(二)』楹聯・帖学・書法國際研討會論文集』香港、香港中文大學芸術系・香港大學中文大學文物館、二〇〇八年、九十七—一二七頁)・薛龍春「応酬与表演: 關於王鐸書法創作情境的一項研究」(『台湾大学美術史研究集刊』第二十九期、二〇〇一年、一五七—二一六頁)。
- (2) 本論では複数人の清代晩期官僚を一まとまりとして扱い彼らの書法活動を分析す

るが、それは必ずしも個々の官僚の活動が一樣であつたことを意味するわけではない。しかしながら、程度の差はあつても、当時の官僚にとって日常的な書法活動はかなり普遍的な現象とみてよからう。また、本論で扱う日記資料の一部には、官途に就く以前の記録も含まれていることを注記しておく。

- (3) 曾紀沢の日記には、彼が欧州に出席していた時期に西洋の筆記具を試用した記録がみえる(劉志惠点校輯注『曾紀沢日記』中冊、長沙、嶽麓書社、一九九八年、一四四—一四五頁)。しかし、これは稀少な例外であらう。以下、清人の日記の引用に当たり初出の際は作者や編者等を記すが、以降は書誌情報は割愛し書名のみ記す。

- (4) 『曾国藩日記』上冊(天津、天津人民出版社、一九九五年、二二五頁)。
- (5) 『曾国藩日記』上冊、六十九頁。
- (6) 明末清初の著名な書法家である王鐸(一五九三—一六五二)もまた、ある日は古典を臨書し、またある日は人の求めに応じて書作したという。これもまた文人の伝統の淵源と見なすことができよう。
- (7) 『曾国藩日記』上冊、四四一・八六二頁。
- (8) 『曾国藩日記』上冊、一四〇—一四一・一四四頁。曾国藩は日記中に「郭氏家廟碑」と明記してはいないが、彼が言及する文字から考えて「郭氏家廟碑」と推察される。
- (9) 『曾国藩日記』上冊、八二一・八一五・八四五頁。
- (10) 戦時であつても、曾紀沢は自身の臨書の習作を故郷から父に送り批正を求めている。また曾国藩(時には幕僚が代行)は批正して、送り返している。日記には「紀沢からの手紙には孔廟碑や玄教碑の臨本が同封されていた」「紀沢はまた書譜一本と崇福寺記一本の臨書を送ってきた。李少荃に批正を頼んだ」といった記事が見える(『曾国藩日記』上冊、四五一・五二三頁)。曾国藩の家族との書簡中には子弟の習字指導の内容はきわめて多く見られるが、ここではすべてを列挙しない。
- (11) 『曾紀沢日記』上冊、六頁。
- (12) 『曾紀沢日記』上冊、二五六頁。
- (13) 『曾紀沢日記』中冊、一〇四頁。
- (14) 『曾紀沢日記』上冊、二二〇—二二四頁。
- (15) 李鴻裔『靠蒼閣日記』(上海圖書館藏稿本)を参照。李鴻裔の『蘇鄰日記』(上海圖書館藏稿本)にも、臨帖の記述は多く見られ、彼は漢碑や唐の楷書を臨書していたことがわかる。日々の学書の記録が残されているわけではないが、彼が書法を酷愛し日課としていたことを推測させる。

- (16) 翁同龢『翁同龢日記』第五卷（上海、中西書局、二〇一一年、二〇九五頁）。
- (17) 葉昌熾『緣督廬日記』第一冊（南京、江蘇古籍出版社、二〇〇二年、一〇八頁）。
- (18) 吳大澂『恒軒日記』（別名『憲齋公手書丁卯・戊辰年日記』上海圖書館藏稿本）。
- (19) 潘祖蔭『潘文勤公与吳憲齋信札』（蘇州博物館藏顧廷龍先生抄本）六十一b—六十二a頁。
- (20) 『潘文勤公与吳憲齋信札』（六十三a頁）。吳大澂は潘祖蔭の求めに応じたようで、潘氏が呉に宛てた別の書簡において「惠臨散盤、感謝、感謝」（六十四a頁）と記している。
- (21) 吳大澂は書法に十分に熟練した後も、絶えず新しい可能性を模索していた。一八八九年に友人の徐熙に宛てた書簡の中で「鄭州の治水工事は十七、八日に終わつた。河の流れは平穩で、特に心配はない。来年は公務が少し楽になり、学書に専念するつもりだ。わが呉碑帖鋪には山谷老人（黄庭堅）の墨刻はあるようだが、さらに法帖屏条にかかわらず、数種類を探してもらえたと有難い。世間では争つて蘇軾と米芾を尊び、黄庭堅を専らにする者はとても少ない。そのため入手しにくいのだ」（『吳大澂手札』（上海、上海書畫出版社、二〇〇七年、十一—十二頁））と記している。吳大澂による臨書作品は数多く現存している。
- (22) 『潘文勤公与吳憲齋信札』六十四b頁。
- (23) 『曾国藩日記』上冊、一七五・二二九頁。
- (24) 『曾国藩日記』上冊、八七四・八七九頁、下冊、二〇五五頁、中冊、九七四頁。
- (25) 『翁同龢日記』第二卷、四八四頁。
- (26) 『翁同龢日記』第二卷、五三四頁。
- (27) 『曾国藩日記』上冊、五一九頁。
- (28) 『翁同龢日記』第二卷、五三一頁。
- (29) 『翁同龢日記』第二卷、五八二頁。
- (30) 『翁同龢日記』第二卷、七八七頁。
- (31) 『曾国藩家書』（北京、宗教文化出版社、一九九九年、四頁）。
- (32) 郭嵩燾『郭嵩燾日記』第二卷（長沙、湖南人民出版社、一九八一年、四十八頁）。
- (33) 吳大澂『恒軒日記』（上海圖書館藏稿本）。
- (34) 『曾国藩日記』中冊、一三三三—一三五二頁。
- (35) 『曾国藩日記』下冊、一九五二—一九六五頁。
- (36) 『翁同龢日記』第二卷、六八〇頁。
- (37) 『翁同龢日記』第三卷、一一四六頁。
- (38) 『翁同龢日記』第三卷、一〇三二・一三三五・一〇九七頁。

- (39) 『曾紀沢日記』上冊、一八〇頁。
- (40) 『曾紀沢日記』上冊、四三一頁。
- (41) 何紹基、曾国藩、翁同龢の日記中にも、一日の間に何度か書作している記述が見られる。
- (42) 何紹基の日記原稿は、湖南省社会科学院図書館に所蔵されている。ここで引用した日記資料は、みな何紹基の研究者である錢松氏にご提供頂いた。
- (43) 李宗侗主編『何紹基手寫日記』（台北、世界書局、一九七一年）。
- (44) 何紹基日記原稿（湖南省社会科学院図書館所蔵）。
- (45) 『曾紀沢日記』上冊、三八三—三八四頁。
- (46) 『曾紀沢日記』上冊、三七九—三九一頁。
- (47) 吳大澂『恒軒日記』（上海圖書館藏稿本）。吳大澂は、時に日記中に書いた扇面の数量を明記している。通常は数柄であり、最多の時で「十余柄」と記す。吳大澂が一ヶ月の間に合わせて少なくとも五十柄前後の扇子を書いていたのは、少ない数量といえよう。
- (48) 吳鵬「舒卷炎涼・明人的書扇贈酬及其文化隱喻」『中国書法』（二〇〇九年第十一期、三十五頁）。
- (49) 『曾紀沢日記』上冊、四二九頁。
- (50) 『曾紀沢日記』中冊、六四四頁。
- (51) 李鴻章『李鴻章全集』第三十五冊（合肥、安徽教育出版社、二〇〇七年、三九一頁）。
- (52) 『李鴻章全集』第三十五冊（三七三・四一四・四一八・四二一・二二二・四四六頁）。李鴻章には書法に長じた幕僚がおり、代筆をしていた可能性も否定できない。ただし、曾国藩の日記には、重要人物の冠婚葬祭については自ら筆を執った記事があり、李鴻章もまた同様の事情が想定できる。
- (53) 『翁同龢日記』第二卷、六六四・六七二頁。
- (54) 『翁同龢日記』第二卷、九五三頁。同治十三年（一八七四）十一月に、曾紀沢も父母を合葬している。供物を送ってくれた軍官に対して、彼もまた扇対で酬謝している（『曾紀沢日記』上冊、四二九頁）。
- (55) 『翁同龢日記』第三卷、一一八四頁。
- (56) 『翁同龢日記』第四卷、一六五六頁。
- (57) 『曾国藩日記』上冊、三九五頁。
- (58) 『曾国藩日記』上冊、一一六四—一一六五頁。
- (59) 『曾国藩日記』中冊、三七七頁。
- (60) 『翁同龢日記』第二卷、六三一頁。

- (61) 『翁同龢日記』第三卷、一三一九頁。
- (62) 『翁同龢日記』第五卷、一三三二頁。
- (63) 『翁同龢日記』第五卷、二四四二—二四四三頁。
- (64) 『曾国藩日記』下冊、二二三七頁。
- (65) 『曾国藩日記』下冊、二〇八三頁。
- (66) 沈津氏による「談善本書中の日記」の一文には、「旧時代の書法家が対聯を書くときは、多くは底本があった。よってしばしば同句のものが見られるのだ。しかし、何紹基は人のために数千の聯を書いたが、句は皆違っている。書写の際には口頭で即興的に句を作ったが、深遠で対句も整っていた。句中には時に官跡や名勝が読まれ、あるいは時候に合わせたもの、あるいは琴書に寄せたものが読まれている。その聯句から作書時の彼の心身の有り様が伝わってくるようだ。(書叢老蠶魚的 BLOG/2008/02/27)」とある。何紹基は一日の内に数十副、多い時に百副の対聯を完成させていたが、書写の際にすべてを即興で作っていた可能性は大きくない。
- (67) 王凱符『八股文概説』(北京、中華書局、二〇〇二年、八十六—八十七頁)。
- (68) 『郭嵩燾日記』第一卷、一〇二—一〇三頁。
- (69) 吳大澂『恒軒日記』(上海圖書館藏稿本)。
- (70) 『吳大澂大篆楹聯』(上海、上海書店出版社、二〇〇一年)。
- (71) 『郭嵩燾日記』第一卷、三〇八頁。
- (72) 復旦大學圖書館は馮桂芬所輯の對聯一冊を所蔵している。題に「顯志堂楹聯」とあり、すべてで八百副余りである。詳しくは、熊月之『馮桂芬評伝』(南京、南京大学出版社、二〇〇四年、一七九頁)を参照。
- (73) 張佩綸『澗于日記』第四冊(台北、台灣學生書局、一九六六年影印本、二二六八頁)。
- (74) 李軍『吳大澂交遊新証』(復旦大學博士論文、二〇一一年、一二〇—一二二頁)より転載。
- (75) 潘祖蔭による鮑康宛ての書簡(上海圖書館藏稿本)。
- (76) 『曾紀沢日記』上冊、四三二頁。
- (77) 『曾紀沢日記』中冊、一一六六頁。雙魚齋出版の對聯書はかなり多く、古今の對聯とともに同時代人(例えば何紹基や莫友芝)の對聯も収録されている。
- (78) 『曾紀沢日記』中冊、六四五頁。
- (79) 『曾紀沢日記』中冊、一二八九頁。
- (80) 『曾国藩日記』中冊、一一一三頁。
- (81) 『曾紀沢日記』上冊、四三二頁。
- (82) 『曾紀沢日記』中冊、一〇七一頁。
- (83) 袁行雲『許瀚年譜』(濟南、齊魯書社、一九八三年、一一七頁)。王学雷「冥心制器出天巧・姚孟起与磨墨機」(『中国書法』二〇〇七年第八期)より転載。引用文中の「磨」は「磨」の誤記であろう。薛龍春氏によれば、磨墨に長時間が費やされたという記事は明代晩期にはすでに多く確認されるという。
- (84) たとえば「食事後、「刑」字を三十習い、扇子一柄を書き、しばらく墨を磨る。(『曾国藩日記』上冊、一四四頁)や、「早起きし、墨を磨り、字を書く(上冊、二九七頁)」などが挙げられる。
- (85) 銭存訓『中国墨製作和鑑賞』、載氏著『中国古代書籍紙墨及印刷術』(北京、北京圖書館出版社、二〇〇二年、一三三頁)。
- (86) 葉昌熾『緣督廬日記』第三冊、一七八一頁。引用文中の「得一閣」は「一得閣」の誤記か。
- (87) 葉昌熾『緣督廬日記』第四冊、一八八六頁。
- (88) 王学雷「冥心制器出天巧・姚孟起与磨墨機」(『中国書法』二〇〇七年第八期)。
- (89) 謝智卿は湖南雙峰県の人、撮影に長けた技術者であり曾紀沢に多年助力した人物。
- (90) 『曾紀沢日記』中冊、一〇五三・一〇五六・一〇六四・一〇七五頁。
- (91) 『曾国藩日記』上冊、一一三頁。
- (92) 『翁同龢日記』第二卷、五六五頁。孝侯とは黄鉦を指す。休寧の人、清の咸豊年間に進士。官は右侍郎に至り、篆書・楷書および山水に巧みであった。
- (93) 『曾紀沢日記』下冊、一七三二頁。
- (94) 『曾紀沢日記』上冊、四三三頁。引用文中の「三体書」は「四体書」の誤記か。錦堂(又は錦唐)はかつて曾紀沢の幕僚であり金銭の出納係を兼ねていた人物。曾紀沢は同治十三年十二月十三日に「辰正起きる。リストを作って親族に銀洋を分けて送る。帳房にいき、錦堂にリストを渡し、その分けた包みに号を記させた」とある(『曾紀沢日記』上冊、四四〇頁)。
- (95) 何炳棣著・葛劍雄訳『明初以降人口及其相關問題』(北京、生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇〇年)を参照。
- (96) 何炳棣氏は「十九世紀後半の四分の一の間は、中国の総人口は一八五〇年のピーク時を超えていたであろう」と指摘している(注九十五所引文献、三三三頁)。
- (97) 楊葆光著・嚴文儒等校点『訂頑日程』(上海、上海古籍出版社、二〇一〇年)。楊葆光、字は古醜、号は蘇庵、別号は紅豆詞人、華亭人。博学で著作は身の丈ほどになる。書画にも巧みで、書法は力強く晋唐の風格をそなえた。
- (98) 二〇一三年一月七日に銭松氏より提供頂いた資料に依る。
- (99) 左宗棠『左宗棠全集・家書』(長沙、嶽麓書社、一九八七年、一五七頁)。この例

より左宗棠は習字を日課としており、臨書作品を人に送っていたことが知られる。
(100) 白謙慎「一八八六年吳大澂在吉林的文化芸術活動」(華人徳・葛鴻楨・王偉林編『明清書法史國際學術研討會論文集』(上海、上海古籍出版社、二〇〇八年、四一六頁)を参照。

(101) 吳大澂『憲齋家書』第二冊(上海圖書館藏稿本)。吳大根は生涯出仕せず、蘇州にある故郷の家で家業の管理に勤めた。

(102) 吳大澂『憲齋家書』第二冊。

(103) この点については、光緒十九年(一八九三)六月十七日に吳訥士への手紙の中に「痔瘡が大いに発し、毎日半日は公文書に目を通して、あとの半日は静かに臥すのみだ。応酬書も滞り約束を守れない」(『憲齋家書』第三冊)とある。

(104) 吳雲『兩疊軒尺牘』卷四(台北、文海出版社、一九七四年、二十一b頁、新頁では二七〇)。

(105) 『曾國藩日記』上冊、五七一頁。

(106) 『曾國藩日記』中冊、一三八一・一三八三頁。

(107) 『曾國藩日記』下冊、一三三四二頁。

(108) 『翁同龢日記』第六卷、二六一一頁。筆者はかつて翁同龢の五世の孫であり、翁同龢日記の収蔵者である翁萬戈氏を訪問した。翁氏の家蔵中に翁同龢と同時代人の書画作品があるかどうか尋ねたが、無いとの回答であった。同時代人の書はそれほど珍重されず保存されてこなかったためであろう。また、当時翁同龢のために書かれた書画があまり多くなかった可能性も大きい。例えば、明代末期から清代初期の書家である王鐸もまた、生涯において人のために無数の書を書いたが、他人が王鐸のために書いた書画はほとんど現存していない。わずかに、常熟の翁氏所蔵の『明季諸名公贈王文安公画扇冊』が見られる程度であろう。この一冊については薛龍春『明季諸名公贈王文安公画扇冊考述』(『中国書画』二〇一〇年、第十一期、五十二―六十一頁)を参照。

(109) 『翁同龢日記』第六卷、一六五七頁。

(110) 国家図書館蔵『吳大澂書札』(編号四八〇三)、第五冊、二十六頁。

(111) 『張佩綸致朱潛書』(梁穎編『歴史文獻』第十三輯、上海、上海古籍出版社、二〇〇九年、一五七頁)掲載。

(112) 石守謙『移動的桃花源・東亞世界中の山水画』(台北、允晨文化実業股份有限公司、二〇一二年、二七七頁)。

(113) 陳智超『美国哈佛大学哈佛燕京圖書館藏明代徽州方氏親友手札七百通考釈』(合肥、安徽大学出版社、二〇〇一年)。

(114) 利瑪竇・金尼閣著、何高濟・王尊仲・李申訳『利瑪竇中国札記』(北京、中華書局、一九八三年、二十五頁)。

(115) Wen Fong (方聞), "Chinese Calligraphy: Theory and History" in Robert Harris, Jr. and Wen Fong, et al., *Embodied Image: Chinese Calligraphy from the John B. Elliott Collection at Princeton* (Princeton: The Art Museum, Princeton University 1999), p. 32.

(116) 『曾紀沢日記』上冊、二五二・二五三・二五五・二七八頁。

(117) たとえ清真寺であっても扁額や対聯の使用については仏寺や道観と同様である。

(118) 現存する清代晩期の対聯をみると、当時の人々は蠟箋を好んで用いたらしい。速く書くことができるようだ。『曾國藩日記』には「午後、琉璃廠に行き対聯紙を買った」とある(上冊、一四八頁)。

(119) 吳大澂は同治八年(一八六九)五月四日に「篆書扇を二つ、条幅を一つ、篆書対聯を三つ、行書の対聯を三つ書く。私はこれまで行書対聯を書かなかつたが、この日は、親戚が上海から送ってよこした対紙四聯を見てうんざりし、行書を交えた。字はとても草率で程子の「即此是学(ただこれを学ぶべし)」の一語に恥じるべきである」(『恒軒日記』上海圖書館藏稿本)とある。この記事からも、吳大澂は理学の影響下にあることが知られ、さらに行書対聯を好んで書かなかつたことがわかる。

(120) 現存する清代晩期の人の書法扇面をみると、少ないもので二十余字(落款を含めない)、通常の行書では五、六十字である。『曾紀沢日記』には彼がかつて扇面に六百余りの字を書いたという記事があり、これは「細密」に当たるであろう(上冊、四七二頁)。

(121) 張充和女士が筆者に講述してくれた話による。

(122) 例えば、「宮扇一柄を書き、孫燮臣世叔が描いたものに題したが、一字間違えてしまい、廃棄して用いながつた」(『曾紀沢日記』下冊、一七九九頁)という記事がある。

(123) 張潮『幽夢影』(上海、中央書店、一九三五年、七十一頁)。

(124) 『翁同龢日記』第五卷、二四四八頁。

(125) 張徳昌『清季一個京官的生活』(香港、香港中文大学出版社、一九七〇年、六十四―一〇三頁)。

(126) 戴丙榮による吳大澂宛ての書簡(上海圖書館蔵『吳大澂親友手札』稿本)。

(127) 『何紹基墨迹』(三)(長沙、湖南美術出版社、一九九六年、四十頁)。

(128) 『名人翰札墨迹』第二十冊(台北、芸文印書館、一九七六年)。

(129) 『何紹基墨迹』(三)、七十頁。

(130) 吳雲『兩疊軒尺牘』卷二、三九頁、新頁碼一五三。

- (131) 上海図書館蔵『恣齋家書』第一冊(稿本)。
- (132) 詳細については、澤田雅弘「潤例の発生と展開—明清における文人売芸家の自立—」(『書学書道史研究』第七号、一九九七年、二十一—三十九頁)を参照。
- (133) 李日華『六硯齋三筆』卷四(文淵閣四庫全書本)。
- (134) 張仲礼『中国紳士的收入』(上海、上海社会科学出版社、二〇〇一年、四十二頁)。
- (135) 傅山『傅山全書』第二冊(太原、山西人民出版社、一九九一年、八六四頁)。
- (136) 松村茂樹「論吳昌碩自訂潤格」(浙江省博物館編『中国書法史国際学術研討会論文集』杭州、西泠印社、二〇〇〇年、三三八—三四五頁)を参照。
- (137) Lothar Ledderose (雷德侯), "Chinese Calligraphy: Art of the Elite," in *World Art: Theme of Unity in Diversity*, vol. 2, edited by Irving Lavin (University Park: Pennsylvania State University Press, 1989), pp. 291-294.
- (138) 『曾紀沢日記』中冊、六六五頁。
- (139) 例えば、「郭子美(松林)の宮扇をきわめて細密に書いた」(『曾紀沢日記』上冊、四七七頁)など。郭松林(?—一八八〇)は湘軍名将であり、曾家との関係はとて深。
- (140) 同治十三年、曾紀沢の母親は亡くなった。彼は急遽船に乗り故郷へ帰った。船旅の道中で世話になった乗務員に対して、彼は事前に書いた対聯を贈っている(「対聯の落款を十幅書いた。輪船諸人にこれを贈る」『曾紀沢日記』上冊、四一八頁)。
- (141) Shih Shou-ch'ien, "Calligraphy as Gift: Wen Cheng-ming's (1470-1559) Calligraphy and the Formation of Szechow Literati Culture," in Cary Y. Liu, Dora C.Y. Ching, and Judith G. Smith eds., *Character and Content in Chinese Calligraphy* (Princeton: The Art Museum, Princeton University, 1999), p. 256.
- (142) 高居翰『画家生涯：伝統中国画家の生活和工作』(北京、生活・読書・新知三聯書店、二〇一二年)。
- (143) 柳揚「応酬—社会史視角下的清代士人書法—」の論中には、「索書」の一節があり専門的に論述され、深く検討されている。
- (144) 『翁同龢日記』第二卷、八〇三頁。
- (145) 筆者は二〇一三年六月二日の匡時オークション会社の講演「晚清官僚がなぜ写那摩的の字」において、一般に政府官僚の残した書作は没後数十年後を経過してからようやく高い市場価値を持ったことを指摘した。
- (146) Joseph R. Levenson (列文森), "The Amateur Ideal in Ming and Early Ching Society: Evidence From Painting," in John Fairbank, ed., *Chinese Thought and Institutions* (Chicago: The University of Chicago Press, 1967) p. 320. 列文森氏が論じる事象は明代のことであるが、
- (147) 基本的には十九世紀後半の儒家中国にも同様の描写が適用できるであろう。
- (147) 二十世紀の中国社会の精英構造の変化が書法芸術に与えた影響については、Qianshen Bai, "From Wu Dacheng to Mao Zedong: The Transformation of Chinese Calligraphy in the Twentieth Century," in Maxwell K. Hearn and Judith G. Smith, eds., *Chinese Art: Modern Expressions* (New York: The Metropolitan Museum of Art, 2001), pp. 246-283, を参照された。

(訳者 徳泉さま とくいずみさま 東京学芸大学非常勤講師)

〔図版・挿図出典〕

図版五 著者提供

挿図1 翁万戈氏提供

挿図2 『呉大澂大篆楹聯』(上海、上海書店出版社、二〇〇一年)。

挿図3 著者提供

〔原文後記〕

本文は、石守謙氏の六十華誕の慶賀に寄せて撰述したものである。文集が事情によりまだ出版されていないため、新たに創刊された『浙江大学芸術与考古研究』に改めて投稿した。本文執筆の過程で薛龍春、銭松、王学雷諸氏の助力を頂いた。ここに併せて記し感謝の意を表す。

〔訳者註〕

(1) 長寿の誕生日を祝賀するために贈られる布製の掛物。

(2) 葬儀の際に死者を追悼するために掛けられる対聯。

(3) 冊頁は折り帖ともいう。書画を一枚ずつ表装して一冊に仕立てたもの。

(4) ここでいう「糖印」が具体的に何を指すのかは不明。引用箇所の原文は、「連日所写零字、系楷書司空表聖「詩品」二十四紙、将用糖印之、以為兒女輩摹本者、本日写畢、編次画格良久」。

(5) 「梓匠の規」は『孟子』尽心篇下「孟子曰、梓匠輪輿、能与人规矩、不能使人巧。(孟子曰はく、梓匠輪輿、能く人に規矩を与うるも、人をして巧みならしむること能はず)」が出典。「梓匠輪輿」は、木工や車大工のこと、「規矩」はコンパスとさしがね。木工や車大工は人にコンパスやさしがねの使い方を教えることはできても、その腕

を巧みにさせることまではできない、という意味。曾国藩は書法においては筆意や間架（点や画の間のあけ方）が規矩に当たるとし、自分は三、四十歳までにその規矩を確立できなかったと述べている。

(6) 原文では、「妙来無過熟」。

(7) 原文では、「熟能生巧」。

(8) 「陶公髹を運ぶ」は『晋書』卷六十六の陶侃伝が出典。陶侃は毎朝部屋から髹を運び出し、夕方にはまたその髹を運び戻して、自らを鍛錬し有事に備えていたという。この故事より、志を立て勤勉に物事に励むことをいう。

(9) 楹帖は、楹聯ともいう。楹は柱の意。対聯を柱に掛けたものをいう。

(10) 摺扇は、摺畳扇ともいう。折り畳める扇。

(11) 宮扇は、宮中で用いられた扇。団扇を指す。

(12) 阿片の吸引を指すか。

(13) 一般に宣紙の規格として、四尺全開は一三八×六十九センチ（縦×横）であり、その縦半分が四尺対開一三八×三十四センチ（縦×横）。六尺全開は一八〇×九十七センチ（縦×横）、その縦半分が六尺対開で一八〇×四十九センチ（縦×横）。

(14) 中堂は、堂幅ともいう。中央の客間の正面に掛ける幅広の掛け軸。

(15) 「礼尚往来（礼は往来を尚ぶ）」は『礼記』曲礼上「礼尚往来、往而不来、非礼也。来而不往、亦非礼也（礼は往来を尚び、往きて来らざるは、非礼なり。来りて往かざるも、亦非礼なり）」が出典。礼には往来（施と報）が必要という。

*原著 白謙慎「晚清官員日常生活の書法」『浙江大学芸術与考古研究（第一輯）』浙江大学出版社、二〇一四年、二一八～二四七頁

（本翻訳論文は平成二十七年海外編集委員による推薦論文である）